

---

# 水面の月

シンイ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

水面の月

### 【Nコード】

N9934V

### 【作者名】

シンイ

### 【あらすじ】

ある日突然神隠しに遭い、異世界で生活することとなった少女伊月。数百年前の日本に似た世界では、月が満ちると不思議なことが起きる。そこから見えるのは、もうひとつの世界の存在。もう一人の異人の存在。

## 彼女のプロローグ

やかましい雀と蝉の声に起こされる。まず目に入るのは、見慣れない木の天井。板敷きの床に、薄いせんべい布団を敷いてその上に伊月は寝ていた。やわらかいベッドの上が日常だった伊月には未だに信じられないことだが、それがここ一週間の一条。伊月の一日の始まり方だった。

気がついたら見知らぬところにいた、だなんて映画や本の中だけだと思っていた。しかし、気がついたら見知らぬ田舎にいた、ということが実際に伊月の身に起きたのだ。

高校からの帰り道、屋気楼のように目の前の景色がぐにやりと歪んだ。と思うと、瞬く間に伊月の周りがコンクリートから土と草に変わった。濃厚な青い匂いが鼻から入ると、ようやく伊月の意識は覚醒した。

それからは、あまり思い出したくもないことが連続した。

伊月は舗装されていないむき出しの地面に立っていた。周りは見渡す限りの田んぼと畑で、彼女の左手はすぐ山である。電信柱も、ビルもない。視界はただただ真夏の濃い緑に埋め尽くされていた。おかしいのは景色だけでなかった。僅かに通りかかる人は、みな時代劇に出てくるような格好をして、伊月の前を通り過ぎるのである。簡素な着物を着て、鬘を結った彼らは、ブラウスに紺のスカートといった一般的な彼女の制服姿に目玉を落とすほど目を見開いて驚くと、すぐに何も無かったとばかりに足早に去っていくのだ。伊月が、ここがどこなのか尋ねようと声をかけても、「うっひゃあ」と悲鳴を上げて逃げてしまう。

(お化けじゃないんだから……。しっつねー)

と、はじめは伊月も思っていたが、それが一人、二人と続くとだん

だんと不安になってきた最後はほとんど悲鳴に近い声をあげていた。「お願い！　ここはどこですか？　話をきいて！」

そんな伊月の叫びもむなしく、着物の人々はものけが出ただの何だの喚いて彼女から一目散に逃げていった。

そんな中で、反対に声をかけてくる者もいた。

「よう、嬢ちゃん。俺たちが力になってあげるぜ。こっちついてきな」

3人の男たちは、伊月におびえる様子もなく近づくと無理やり腕を掴んでひっぱってどこかへ連れて行こうとした。ようやく話を聞いてもらえそうな人に出会えたと喜んだのもつかの間、彼らの上から下まで舐めるように見られる視線に鳥肌が立った。なんとなくでも良くない人間だというのは伊月にも分かる。隙を突いて一目散に走り出し、幸運にも彼等を振り切った後は木の陰にうずくまって夜を過ごした。色とりどりの人工的な光も、月明かりも全くない、生まれて初めて経験する本当の暗闇。

眠ることなどできない。見つかるかもしれないと知りつつも、声を殺して泣いた。

「おはよう、伊月」

部屋の外にある井戸で顔を洗っていると、一人の若い女性が近づいてきた。

「おはようございます。お美代さん」

お美代と呼ばれた女性は、にこにここと優しい笑みを浮かべて井戸の桶を手を取った。彼女は、この地で伊月を保護してくれている山本大吾の妻で、右も左も分からない伊月に色々とよくしてくれている。衣食住の他に、金勘定の仕方、洗濯・炊事など、日常生活にかかせない知識を、伊月が困ったときに少しずつ教えてくれるので、伊月はこの一週間で山本夫妻をかなり慕うようになっていた。

「早起きも慣れたみたいね。あんなお寝坊さんは初めて見たもの」

「あはは、すみません。もう、ちゃんと起きれますよ」

井戸水を汲みながらお美代はからかい混じりに言った。ここの朝はとにかく早い。日が昇るか否か、位の時間に大人も子どもも起きてその日の準備に取り掛かる。その分夜も早いのだが。夜更かしと目覚まし時計に頼りきった生活をしていた伊月は、彼女の言う通り大寝坊を繰り返していたのだ。

「なんだかまだ他人行儀だねえ。あんたを拾って七日たつけど、あたしたちはあんたを本当の家族同然に思っているんだよ。なんならお母さんって呼んでもいいんだから」

しかめっ面をしながらお美代が言う。初めて顔を合わせたとき、家族が（この世界には）いないと言った伊月に、彼女たちはひどく同情してくれた。それから2人は、よくこのように自分たちを家族代わりにしていい、という。誰も頼る人間がない伊月にはうれしい言葉だったが。

（さすがに20代の人をお母さんとは呼べない……）

昔の日本のようなこの世界では、女は15、6歳で子どもがいるのは当たり前らしい。お美代もその頃に大吾と結婚したらしく、どう見てもまだ20代半ばだった。これで十になる息子が一人いるのだから、伊月は自分の年に置き換えて驚いたものだ。

「さあて、支度が済んだら朝餉の準備を手伝ってちょうだい。本当、かまどの使い方が分からないのには驚いたけど、一応料理はできるみたいだし。変な子ねえ」

お美代はくすくすと笑いながら、土間の方へ向かった。伊月もその後を追いつながら、厨に立つ彼女の一挙手一投足を見逃すまいと観察していた。お美代もそれを分かっているのか、時々仕草をゆつくりと見せてくれる。重たくて切りにくい包丁で不器用に野菜の皮むきをしながら思う。まずここの生活に慣れること。常識の何もかもが違うこの世界で自分は子ども以下だ。不便はたくさんあるけれども、できない理由にはいけない。一日目でわかってしまったのだ。もののけと呼ばれて距離を置かれた。変な男に売られそうになった。

夜の森では、獣の息遣いと男たちの追跡にびくびくしながら一夜を明かした。ここの生活に馴染めないと本当に死んでしまう。  
帰ることを考えるのはその次だ。

## 上弦の声 1

あれからさらに十日ばかりが過ぎた。最近、伊月も家事以外に山本夫妻の仕事を手伝えるようになっていた。

山本夫妻はこの町で扇子屋を営んでいる。店の主人である大吾の両親が早くに亡くなっているため、伊月が来るまでは長いこと家族3人で店をまわしていたらしい。庶民でありながら身寄りもない人間を一人養えたのもこの扇子屋という職業のおかげで、それもラッキーだったと伊月は思っていた。ここがいつの時代なのか伊月には分からなかったが、あまり庶民の暮らしが良くないのには気づいていた。それでも成人に近い人間を迎え入れることができたのは、山村夫妻の人柄と、客層のほとんどが上流階級で生活面に多少の余裕があつたこともあるのだろう。

店にはお美代が出ていて、隣の部屋で伊月と大吾、その息子の吾郎太が作業をしていた。

主人の大吾は、かなり寡黙というか、お美代曰く、無口・無表情・無愛想の近所でも有名な三無の男らしい。しかも、小柄な人間が多いこの世界で頭一つ飛び出る大吾は、居るだけかなりの威圧感を放っていた。始めのころは伊月も彼とのコミュニケーションに大分戸惑ったが、話しかければぶっきらぼうでもきちんと返してくれるし、分からないことは嫌味一つ言うこと無く、丁寧に教えてくれる。ちやんとできたときは、ポンポンと頭を撫でてくれるので、今では「見た目はちょっと怖いけど優しいお兄さん」と認識している。そんな彼の息子、吾郎太は彼の性格をまったく受け継がなかったようで、子どもらしく快活で、表情もくるくると良く変わる。人見知りもしないせいか伊月とはすぐに仲良くなった。世話焼きなところはお美代に似たのか、何も知らない伊月に対して吾郎太は兄のように接してくる。一人っ子の彼には5歳年上でも妹ができた感覚らしい。ちよっと複雑だが、実際10歳とは思えないくらいしっかりしている

ので、伊月も年上ぶらずに頼りにしている。今も、注文書などの事務処理をしている大吾に代わって、簡単な糊付けの作業を教えられていた。

「伊月。今度はこっちの糊使って」

吾郎太が新しい糊を持ってやってきた。ほんのりと良い香りがする。

「これは、香料混ぜてんだ。女とかはこういうの好きだから良く売れんだぜ」

そういつて吾郎太はにかつと笑った。今やっているのは扇子の骨に糊を塗る作業だ。その骨を吾郎太が受け取り、紙に差ししていく。なるほど、扇子からいい匂いがするのはこの糊のおかげなのか。伊月は糊の入った椀を受け取り、新しい刷毛を使って作業を続けた。

伊月と吾郎太のしている作業は、ツケと呼ばれる扇子作りの仕上げの工程だ。本来はツケ職人に任せるのだが、安い庶民用の扇子は自分たちでツケの作業をしているのだとか。これは先代が発案した経費削減の一つだそうで、貴族相手のものや、大量に注文があったときは、プロのツケ職人に頼んでそれを入荷する。20以上の工程があり、たくさんの職人の手によって作られる扇子だから、なるべく低予算でやりくりしたいらしい。彼らは本職でないとはいえ、幼いころから店を手伝っている大吾や、小さいながらに一生懸命な吾郎太は手際がよく、伊月の目から見ても売り物としてどれも素晴らしい出来栄えだ。

「吾郎太くん。糊付けの骨はこれで最後だけど、次何すればいい？」

「あ、終わった？ じゃ、おれもこれが最後だな。父ちゃん、こなし」やればいいのか？」

吾郎太が最後の中骨を差し込みながら、大吾に尋ねた。大吾はすでに事務処理が終わっていたようで、先ほど吾郎太が骨を差し込んだ扇子を木の棒でとんとんと叩いていた。大吾はぬつと顔をあげ二人を見ると、



「母さんのところへ行け。それは俺がやっておく」

と言ってまた作業に戻った。大吾が無愛想なのはいつものことなので、わかったと返事をする、二人は使った刷毛や容器を片付けて店番をしているお美代の元へ向かった。

店の方は丁度お昼時ということもあって、客は少なかつた。お美代は通りに面した入り口の外で、数人の女性と立ち話をしている。笑い声も聞こえるので、仕事関係の話ではないと分かり、安心して近づいた。

「あら、吾郎坊と伊月さんじゃない。こんにちは」

話し相手の女性の方が先に気がつき、それぞれ笑顔と挨拶をくれる。

「近所さんに伊月は、ひどい目にあって記憶を失った可哀想な少女として知られていた。これは大吾が言い出したことで、変わった服装で倒れていた伊月のことは、あまり町人たちに知らせない方がいいだろうとのことだった。伊月としても根掘り葉掘り聞かれるのは嫌だし、また奇異の目の見られるのもごめんなので、適当に話を合わせている。何か困ったことがあっても、「覚えていません」で切り抜けられるので、常識に疎い伊月にはぴったりの身の上話だった。

「母ちゃん、父ちゃんがこっちに行けって言ったけど、おれたち何すればいいの？」

吾郎太の質問に「そうそう」とお美代は店の奥に引っ込んだ。すぐに布に包まれた荷物を持ってくると、

「これを橋場屋さんに持って行って頂戴。御代はもう頂いているから、渡すだけでいいわよ。あとこれ」

布を伊月に持たせると、吾郎太に数枚の小銭を持たせた。

「丁度お昼だから、通りで何か食べていらっしやい」

そしてお美代はまたにぎやかなおしゃべりに混ざっていった。二人は一応「いつてきます」と言っただけはみたが、お美代にはもう聞かないらしい。吾郎太がしょうがねえな、と笑って伊月の袖を引っ

張った。

「行くう。ああなると母ちゃん長いんだ。待ってるとう日が暮れるぜ。つあた！」

ゴツつと鈍い音がして、にやにや笑いの吾郎太にお美代の拳骨が落ちた。そこはしっかり聞かれていたらしい。ぶつぶつ文句を言う吾郎太を宥めて、今度こそいつてきますと店を後にした。

町の大通りは物売りや、道行く行商人でとても賑わっていた。今までは家の中での手伝いや仕事を覚えるのに精一杯だったので、伊月にとっては初めての外出である。物珍しさにきよるきよると視線をあちこちに向けていると、すぐ側で視線を感じた。僅かに下の方へ顔を向けるとじっと見つめる吾郎太と目が合う。なんだろうと思っ

ていると、突然吾郎太がプツと吹き出して笑い始めた。  
「しょうがないでしょ。初めて見るのばかりだもん。吾郎太くん、そんな笑わないでよ」

年下に笑われた、と恥ずかしくなって言い訳じみた言い方になってしまった。伊月のそんな物言いが、さらに吾郎太のツボにはまってヒーヒーと目に涙を浮かべて苦しそうにしている。しばらくして落ち着いた吾郎太が、はあ、とため息を着いて、

「本当にここじゃないとこから来たんだな」と言った。

伊月は吾郎太たちに、『この世界ではないどこか遠いところで、神隠しにあつた』と説明していた。東京や電話などの話をしても、まったく知らない聞いたこともないという彼らにはこれ以外に話しようがなかったのだ。そして、過去に来てしまったかとも伝えていない。一度試しに、日本史の時代ごとに有名な将軍や英雄の名前を出してみたのだが、それも聞いたことがないと言われたのだ。だから、ここは『昔の日本のような世界』で、自分のいた『日本』とは同じ線上にないのではないかと伊月は考えていた。

土と木でできた平屋の町並みを見てみると、コンクリートやガラスがふんだんに使われた灰色の故郷が恋しくなる。一度向こうのこ

とを意識してしまうと、芋づる式に家族や学校の友達の顔が浮かんできたので思わず俯いた。こんな町中でホームシックなんてみつきもないと気を引き締めると、吾郎太がそっと手を握ってきて「きつ

と帰れるよ」と呟いた。

そのまま吾郎太に手を引かれながら、伊月は覚束ない足取りでお使いを頼まれた橋場屋へ向かっていった。通りには石が敷いてあるとはいえ道はでこぼこしているし、小袖姿に慣れない草履でとにかく歩きにくかった。おまけに通りを行くほとんどの人たちは、大きな荷物を持っているし、中には馬を牽いている人もいるのでぶつからないようにも気を付けなくてはならない。しかし、吾郎太はそんな人波もなんのそので、子どもの身軽さでぐんぐん先へ行ってしまう。だから、手をつないでいるというよりは、引きずられているような感覚だ。一人で満足に街中を歩けない自分にだんだん情けなくなってきたところで、手を引く力が弱まって吾郎太が足を止めた。

「ここが、橋場屋だよ」

橋場屋は町のほぼ中心部に位置していた。ほとんどが平屋の民家と比べると、飛び出た白壁の倉がとても大きく立派に見える。

「橋場屋は土倉なんだ」

「つちくら？」

初めて聞いた単語に頭をひねっている、「なんて言ったらいいかなあ」と吾郎太も一緒に首を傾けた。

「えっと……、いろいろものを預かって、換わりに金を貸してる、仕事のこと、かな。よくわかんないけど、すっごい儲かってるし。まあ、おれたちにはあんまり関係ないよ」

と、ちよつと困った顔をした。吾郎太の言うとおり、土倉には質のいい着物を着た人が出入りしている。対応をしている者も裕福そうだ。そのうちの一人に、

「すんませーん」

と声をかけて、

「山本扇子の吾郎太です。品を届けに参りました」

と、伊月に前に出るよう促した。しっかりした口調と振る舞いに、この世界の子どもは本当に大人びているなと感心していると、使用

人らしき風体の男がこちらに近づいてきた。伊月がおそろおそろ荷を差し出すと、男は中身を確認して、

「確かに受け取りました。主人にはこちらでお渡ししますのです。ご苦労様でした」

と言つて、慌しく奥へ引つ込んでいった。

無事お使いが完了したので、二人はお美代に言われたとおり町の蕎麦屋に来ていた。昼飯時も過ぎ、みな仕事に戻った後なのか、店内はほどよく空いていた。蕎麦をずると啜りながら、初めての外出の感想を伊月は話していた。吾郎太もおしゃべりなので、会話が途切れることは無い。たまに、店の人間も話しに混ざりながら楽しい昼食の時間を過ごした。

「そういえば、朝お店を出たときも思つたけど、すごく賑わってるんだね。こんなに人通りが多いとは思つてなかったから、ちよつとびっくりしたよ」

蕎麦屋を出た後、目の前を頭に桶を乗せて歩いていく女性や、棒で籠を担いだ男たちを見て伊月は言った。少し離れたところでは、柱と屋根だけのテントのようなものが建ち並んでおり、そこに人が集まっている。

「まあ、ここの町はけっこう大きい方らしいからな。旅の人とかも活気があるつてよく言ってるよ。あと、今日は市の立つ日だからそれもあるんじゃないかな」

あのテントのようなところでは市が立っているらしい。フリーマーケットみたいだなと近づいてみると、新鮮な魚介類や、カブやごぼうなどの野菜、他にも茶碗や鍋などの様々な生活用品が売られている。

吾郎太は道の先にある水路を指差した。

「市に合わせて、あそこから舟で米とかが運ばれてくるんだ」

見ると、丁度舟がやってくるころだった。舟といっても丸太をくり抜いたような簡単なものだったが、細い水路ではそちらの方が勝手がいいのだと吾郎太は言った。

しばらくの間、吾郎太からあれこれ教わりながら市を覗いていると、向こうから淡い紅色の小袖を着た女の子が近づいてきた。

「吾郎太でしょ。こんな時間にめずらしいわね」

おそらく吾郎太と同じくらいの年の子は、たたと小走りでごちらへ来て話しかけた。とたんに吾郎太は面倒くさそうな顔になり、  
「げえー、と声を漏らす。」

「ちよつと聞こえてるわよ、なあにその顔」

「シイノか。なんでいるんだよ」

「市に来たんだから買物に決まっていますでしょう？ 本当馬鹿なんだから。それよりもそちらの方は？ もしかして、おじさんたちの家にお世話になっているって人？」

手に持った荷物を吾郎太の顔に押し付けた後、シイノと呼ばれた子は好奇心旺盛な黒い目で伊月をじいと思つめる。吾郎太は頭をかきながら、そうだよとぶつきらぼうに言った。

「伊月っていうんだ。いろいろあって今うちの店で手伝いしてる。人にはじじよーってのがあるんだから、いつもの調子でずけずけ聞くんじゃないぞ」

なげやりな説明にシイノはむつとして吾郎太を睨んだが、すぐに笑顔で伊月にお辞儀をした。

「初めまして、伊月さん。わたしは、東屋のシイノです。家は染物屋をしているので、近くにいらした時はぜひ立ち寄ってくださいな」

にこつと可愛らしい笑顔で丁寧な挨拶をされた。初対面でも明るい性格のいい子なのが分かる。こちらも笑顔でよろしくね、と返した。

「じゃあ、わたしは家に帰らないといけないのでこれで。伊月さん、またゆつくりお話ししましょうね。あと、吾郎太！ 伊月さんは年上なんだから、あんな言葉遣いじゃ失礼でしょ！」

「じゃあね、伊月さんさようなら、と去っていく彼女を吾郎太は見えないようにしつしと手で追いやった。」

「シイノちゃん、可愛くていい子なのに。苦手なの？」

「そうじゃないけど……。あいつ、いつこしか違わないのに昔っから年上ぶってさ。口うるせーっていうか……」

だんだん尻すぼみになっていく吾郎太に笑いをこぼすと、ふと何か  
が耳元で聞こえた。

「ねえ、今何か言った？」

「ん？ シイノの愚痴しか言っていないけど」

「そうじゃなくて……」

伊月がきよろきよると辺りを見回すと吾郎太が、

「隣の人が水撒いてたからなあ、それじゃないの？ まだあつつい

からさ。早く帰って涼もうぜ」

と、水溜りの水を蹴った。

## 上弦の声 2 (後書き)

ここまで読んで下さりありがとうございます。

作中にも出てきましたが、この「水面の月」は日本史とはまったくの無関係のものです。あくまで、昔の日本を『モチーフにした世界』ということで書いていますので、あまり鵜呑みになさらないようお願いします。

伊月たちはこういう生活をしているのね、くらいの気持ちで楽しんで頂ければと思います。



## 十五夜逢瀬 1

夏も終わり、秋の風が吹き始めた頃。伊月は虫の鳴き声をBGMに、囲炉裏を囲んで皆で夕食を取っていた。今日のメニューは焼きたいわしと、胡瓜の漬物に乾物の入った味噌汁。主食は雑穀を混ぜたご飯だ。今までの食生活と比べるとかなり質素だが、それでも一日三食食べられるのは幸せである。現代のしょっぱいスナック菓子や、甘いスイーツが恋しい頃もあったが、ひと月もたてば薄い味付けに舌も慣れる。むしろ、戻ったときに向こうの濃い味付けに耐えられるかが心配だ。そんなことを考えていると、大吾が味噌汁の椀を静かに下ろした。それだけで、何か話があるのだと察したお美代が姿勢を正したので、伊月や吾郎太も箸を置いてピンと背筋を伸ばした。

「わかつていると思うが、明日は望月だ。誰も外へ出るな。日中もなるべく外出は避ける」

大吾はゆっくりと念を押すように言った。とたん、お美代と吾郎太がハツとした顔をするが、伊月には何のことだか分からない。いつも和やかな山本家だけに、しんと静まり返った食卓はなんとも不気味だ。なんとか勇氣を出して尋ねた。

「あの、望月って満月のことですよ。明日何かあるんですか？」

満月の夜といったら狼男とかのイメージだが、まさか本当に出るわけではあるまい。三人の深刻そうな顔に怯えつつも隣のお美代を伺うと、そうか知らないんだねえ、と小言で何かぶつぶつ言っていた。

「望月の日はねえ、『影映り』があるのよ」

「影……映り……ですか？」

初めて聞く単語に、ますますわけが分からなくなってくる。表情から十中八九悪い出来事のようなのだが、何のことなのか伊月にはまったく想像がつかない。

「『かすかべ』が見える日なんだ」

「かすかべ？」

「月の下の辺りと書いて『月下辺』<sup>かすかべ</sup>という。幻のようなものだ」  
大吾が吾郎太に着け添える形で話す。

「月が満ちると、川や池にこの『月下辺』が映る。これを俺たちは『影映り』と呼んでいる」

「そうなんですか……。その幻って、何が視えるんですか？」

正面の大吾は、いわしに箸をのばして口へ放り込む。もう食事を再開していいらしい。待つてましたと吾郎太が飯を掻き込んで、もごもごしながら伊月の問いに答えた。

「なんでも映るよ。どっかの家の中とか、建物とか。あと人も映ったりする。あと……」

「ものが無くなったり、出てきたりするのよ」

「食いモンを入れたまましゃべるな、と注意された吾郎太に代わってお美代が後をつぐ。

「だから、望月の日はみんな落ち着かないのよ。私たち庶民は大事な商品が無くなったりするし、武士様や貴族様は高価な茶碗や刀が消えちゃったりするからねえ」

要するに、何か物が突然行方不明になったりするはた迷惑な日、ということだろうか。幻が見えて、物がなくなるだけならたいして危険はなさそうである。

「先月は確か……筆と作りかけの扇子だったよな。あれ、おれが踏んづけて駄目にしたから丁度良かったんだよなあ」

あはははは、と笑い出す吾郎太にお美代が目を吊り上げた。

「私はそれ初耳だよ。それで嬉しそうに話してたんだねっ」

「あ、やべ」

「だ・い・じ・な・売り物になんてことしてんだい！ ちょっとこつち来なさい」

お美代が吾郎太の耳をつかんで自分のほうへ引っ張っていく。この光景もひと月ほどの間に何度となく繰り返されていたので、微苦笑

を浮かべて伊月は夕食を再開した。吾郎太が助けを求めて伊月を見るが、見えないふりだ。怒ったお美代は怖い。触らぬ神にたたりなしである。黙々と食べる大吾に倣って伊月も箸を進めた。粟か何かの混ぜたご飯は、向こうで流行った健康食を食べている感覚だ。毎日食べているし、もしかしたらダイエットになるかも、と思うのは女子高生だからか。

先ほどの落ち込んだ雰囲気など無かったかのように、この日の夜もにぎやかな夕食が続いた。

次の日、すっかり伊月の仕事となった扇子作りの手伝いをしていると、裏口の方から《すみませーん》と男の声が聞こえた。裏口側は、山本家と長屋に口の字で囲まれた中庭がある。井戸は長屋の人たちと共有なので、朝は洗濯物を干す女性たちのおしゃべりの場となっている。正真正銘の井戸端会議というやつだ。そんなたくさんの人で賑わう中庭も、昼間は仕事で忙しいのか、閑散としている。普段裏口から訪ねてくる人は少ないが、今日は満月の日だ。出かけるなどといわれるくらいだから、皆家にいるのかもしれない。家の中をぐるりと見渡せば、お美代は店番をしながら忙しくそろばんを弾いているし、吾郎太も作業に没頭しているのか二人とも来客に気がつかなかったようだ。大吾は人に呼ばれたので朝から不在。作業も切り良く終わった伊月が、裏口へ向かった。

土間から勝手口の方へ行き、立て付けの悪い引き戸を少しだけ開ける。

「どちら様ですか？」

と、声をかけるが返事が無い。もう一度、声をかけてから思い切つて引き戸を開け外へ顔を出してみた。

「あれ？」

中庭には誰も居なかった。秋に入ったとはいえ、まだ眩しい残暑の強い光が伊月の目を刺す。ささっと黒猫が一匹井戸の前を横切つた。

「どうした？」

吾郎太が、座ったまま首だけ土間の方に向けて呼びかけた。

「あ、ううん。勘違いかな？ すいませんって聞こえたんだけど、誰もいなくて」

申し訳なさそうに言う伊月に、吾郎太は道具を放り投げてこちらに走りより、乱暴に戸を閉めた。振り向いた吾郎太は無表情だった。くりつとした大きな目だけが強い光を放っている。その豹変ぶりに伊月はごくりとつばを飲み込んだ。

「あんまり聞くな」

子どもらしからぬ低い声が落ちた。静かでもゆつくりと、重さを持って耳に入るその声は、吾郎太や伊月を叱るときの大吾に似ている。萎縮した伊月の様子に気づいたのか、吾郎太は、

「『影映り』は声も運ぶ。から、あんまり耳を傾けちゃ駄目だ。本当かは分からないけど、あつちに連れてかれちゃうんだってさ！

伊月はちよつと抜けてるから気をつけるよ！」  
と、茶化して笑った。

「う、ん。気をつけるよ。ていうか、抜けてなんか無いから」

一種の気味の悪さを感じながらも、それを伊月はぎこちない笑顔で誤魔化した。『影映り』という現象が伊月の思っている以上に怖れられている。確かに、誰もいないところで声が聞こえたり、人影が映るのは怪奇現象のようで不気味かもしれないが、直接人に危害を与えたりするものではないようなので、伊月はあまり危険視していなかった。認識が甘かったのだらうか、あの吾郎太の表情を無くした貌の方がいっそう恐ろしく感じた。

## 十五夜逢瀬 2

その日の夜、皆が寝静まっても伊月はなかなか寝付くことができなかつた。先ほどからじつと居間の天井を見つめるばかりで、ちつとも目をつぶる気にならない。皆で雑魚寝をしているので、時折ごろごろと吾郎太が転がりまわる音がする。

(……寝むれない。ちよつと水でも飲んでこようかな)

起こさないように静かに起き上がると、できるだけ足音を消して土間へ移動する。電気が無いので、窓から入る僅かな月明かりと勘を頼りに歩く。土間の隅のほうに水瓶が置いてあるので、柄杓を用いて直接飲んだ。ひんやりとした井戸水が丁度良い室温になっている。今夜は雲が無いのか、かまどの上の小さな窓から差し込む仄白い光が伊月を照らす。

(ここの人たちはお月見を楽しんだりはしないんだろうな)

窓の外を見ながら、ふと思う。この世界に来て一ヶ月、この人々が毎日の生活に堅実で、真つ直ぐに生きていることはひしひしと感じていた。それは、ついこの間まで学校で習っていた古典の世界を見ているようだった。現代にはない独特な時間の流れ方に憧憬の思いを込めていたのかもしれない。短歌や昔話にあるように、きっと、月夜も彼らなりの楽しみ方をするのだと勝手に思っていたのだ。だからこそ、昼間の出来事は小骨が喉に刺さつたようで、上手く飲み込めずに伊月の心をもやもやさせていた。彼らの反応が理解できない。皆が過剰に警戒する『影映り』の存在は、改めてここが自分の世界とはかけ離れた場所であると認識させた。

「そういえば、池とか川に映るんだっけ。これも見えたりするのかな」

伊月はほんの好奇心で、水瓶の中を覗き込んだ。『影映り』で声は渡っていないのか、家の中は山本家3人の静かな寝息しか聞こえ

ない。

実際のところ『影映り』に関して伊月は半信半疑だった。昼間は周りの雰囲気気圧されて信じ込んでしまったが、よく考えてみれば近所の声かたまたま聞こえただけかもしれない。ここにきて、テレビドラマでよくある迷信や言い伝えのようなものだと思います。始めていた。

（ほらね、やっぱり何も見えない）

水面に映るのは自分の顔だ。暗くてはつきりとは見えないが、ゆるく結んだセミロングの髪を前に垂らした影は確かに自分だ。前髪を2つピンクのヘアピンで留めている。間違いない。

（あ、外さないで寝ようとしてたんだ）

少し前から伊月は仕事の邪魔にならないよう、家の中にいるときだけ現代で使っていたヘアピンを愛用していた。その時、お美代が少女のような目で見てきたので、別の青い方をあげた。やっぱりこの時代でも女性はおしゃれに興味があるのだと二人で笑ったのを思い出して、一人笑いを堪えながらヘアピンをはずそうと手を伸ばした。途端、ゆらり、不自然に水面が揺らめいた。

風に揺らされたわけでもなく、ただ映った影だけがゆらゆらと動いている。その証拠に水面は波立つことも無く静かだ。一瞬で大吾たちの言葉を思い出して、2、3歩飛びのいてそのまま後退する。何が起ころか分からない恐怖に、瞬きもできずにその場所をじっと見ていると、突然あることが頭をよぎった。『月下辺』とはなんだろうか。大吾たちは、幻だと言っていた。町や人が映るのだとも。しかし、具体的にどんな場所だとは聞いていない。もしかしたら。

「もしかしたら、私の世界が映るのかもしれない」

そう思ったら、恐ろしさは消えてゆっくりと近づいていた。どきどきとうるさい胸を押さえ、祈る気持ちで再び水瓶を覗き込んだ。

結局、伊月の期待は叶わなかった。

映っていたのは人影だ。暗くてよく分からないが、体の線が男の

ような気がする。人影は夜着を一枚纏っているの、結局『月下辺』はこちらと似たようなところなのだろう。後ろに映る景色にも現代との共通点を見つけたことができなかった。落胆を隠せないでいると、人影が角度を変えたのか先ほどよりも鮮明に形を捉えることができた。やはり男だった。白い夜着に、項<sup>うなじ</sup>あたりで切られた髪。鬚がないのは珍しい。長めの前髪を横に流している。まだ若い。自分より少し年上くらいだろうかと見ていると、彼の目元で何かが反射した。

「うそ……」

おもわず声を出してしまった。反射したのは眼鏡だ。細いフレームで分かりにくかったが、確かに彼は眼鏡をしている。何故。驚きに目を離せないでいると、彼と目が合った。彼も一瞬驚いた顔をしたが、すぐに警戒して睨み付けてきた。もしかしくとも、こちらも向こうに視えているのだろうか。彼の前髪に隠れた切れ長の目とシャープな顔立ちの所為で、睨まれると迫力がある。こちらも緊張したまましばらく睨み合いが続いていると、向こうの視線が逸らされた。少しほっとして、彼の視線を追うと伊月の額を見ている。何か付いているのだろうかと手を当てると、固いヘアピンに触れた。これを見ていたのかと水面の彼にもう一度意識を向けると、その表情に伊月の全てが奪われてしまった。

彼の泣きそうに歪められた顔が、翌朝になっても伊月の頭から離れない。

その後、伊月が無意識に手を伸ばして水面に触れたことで、『影映り』は終わってしまった。しばらくその場に留まり、もう一度『影映り』が起きないかと見ていたが何も映らずに夜が明けた。朝、一番早起きのお美代が寝不足の伊月を心配してくれたが、適当に誤魔化し仕度を手伝う。

彼はなぜあんな顔を見せたのだろうか。味噌汁の具材を切りながら伊月の頭は昨夜のことを考えていた。彼のいる『月下辺』は現代な

のだろうか。ならば何故あんなにも苦しそうな表情を浮かべたのか。  
わからないことばかりだ。

（また、会えないかな）

彼は今、いったいどこにいるのだろうか。



## 繁劇の十六夜 1

満月の次の日はどこの店も休みと決まっているらしい。朝餉の席で伊月はそう告げられた。まだ、夜のことが脳裏に残っていた伊月は生返事だった。

「吾郎太は分かっていると思うけど、伊月、あんたは初めてだからね。今日一日は、失せ物がないかの確認作業をするのが慣わしよ。だから、町中がお休みなな」

「じゃあ、今日は私もその確認作業をすればいいんですね。任せてください」

慌てて自分の作った茄子の味噌汁を床に置いて頷くと、お美代は違うのよと首を横に振った。

「伊月には、町の『検め衆<sup>あまた</sup>』の方に行ってもらうわ」

「え！？ 伊月に行かせるのか？おれも行く！ いつもおれだったから今回もいいだろ」

お美代が笑って言うと、吾郎太が食いついてきた。『検め衆』が何かわからないが、吾郎太も一緒なら心強い。

「いつもあんたが行っているから、今日は伊月だけに行ってもらいます」

だけ、を強調してお美代がぴしゃりと言った。その言葉に吾郎太はあからさまに膨れっ面になり、伊月も肩を落とした。不安げな伊月の様子にお美代は優しく話しかける。

「大丈夫よ。難しいことはしないわ。ちょっと町の見回りであちこち歩き回るだけだもの。吾郎太にだってできるんだから、あんたなら楽勝よ」

「ぱちん、と伊月に向かってウインクをして「ねえ、父ちゃん」と今度は大吾に振った。大吾はうむ、と頷いてかぼちゃの煮つけに箸をのばした。それでも吾郎太は胡瓜の漬物をバリバリ齧りながら、「でも、いろんなやつが来るだろ。まだ、伊月はあんまり外に出た

ことないじゃないか。父ちゃんも母ちゃんも心配じゃないのかよ」と、不満をならした。相変わらず、吾郎太にとって伊月はまだまだ妹分のポジションにいるらしい。だが、さすがにここまで言われれば伊月も年上としてのプライドに火がつく。

「大吾さん、お美代さん、その『検め衆』、一人で、しっかり参加してきます。吾郎太くんは、私の心配なんかしないで吾郎太くんの仕事をしてね」

「そうよ、伊月。若い子がいつまでも家の中引き籠もっているなんて、不健康なもの。町に慣れてないならなおさらよ。丁度いいから行っておいで」

力強く言い切った伊月を、お美代が後押ししてくれる。まだ何か言いたげな吾郎太に大吾が、

「おまえも店の中を全て調べなおしたことはなかっただろう。いい機会だ。やれ」  
の一言で口を閉ざした。

朝餉の後は、皆それぞれの仕事に移った。お美代が家の中のことをやってくれるらしい。これから中庭で洗濯をするのだろう。彼女の持つ大きなたらいには、二日分の洗濯物が入っている。すでに、井戸の周りでは長屋から何人が出てきており、おしゃべりの声が聞こえてくる。大吾と吾郎太は店と家の中の確認だ。『影映り』で無くなったものを探す。何かあれば紙に記載し、町の役場に届けに行く。それは、どんなに小さなものでも書かなくてはならないらしく、たとえ箸の一本でも無くなれば届け出るのが町民の義務になっている。そして、伊月は『検め衆』に参加すべく町の西門へ向かっていた。

## 繁劇の十六夜 2

町の西門は、いわばこの町の入り口である。山本家から歩いて四分のところにあり、西門から東門へ向かう道が町のメインストリートだ。先日伊月たちが立ち寄った市もこの本通りの一番西側で開かれる。西側には水路が南北に通っているので、町へ入るときは小さな橋を渡らなければならない。町人から『またせ橋』と呼ばれるその橋の前が集合場所だ。

またせ橋に着くとそこにはすでに二十数名が集まっていた。小学生くらいの子どももいれば、お年寄りもいる。一番多いのは、自分と同じくらいの年の男女だ。見たところ半分以上がまだ十代だろう。皆顔見知りのようで、それぞれ男同士、女同士で固まって話をしてる。その中で、年の近そうな女の子の集まりがあつたので近づいてみたが、ちらとこちらを見られただけでさりげなく距離を置かれてしまった。明らかに伊月の存在に気がついているのに、視線を合わせないようにしている。

(なんか、学校を思い出すな)

女の子の社会にはグループというものがしつかりある。いじめられたこともないし、したこともないが、なんとなく普段仲良くしている友達以外の子とは話しづらい。そして、なかなか入りづらい。そもそも、グループでは似たような楽しみや考えを共有できる子達が集まるわけだ。こういう場合、どことなくお互いに合わないだろうなという気がしたりするものだ。険悪ではないし、嫌いというわけではないが、どうも「自分たちとは違う人たち」という感覚を抱いてしまう。そういうわけなので、唯一の女の子グループに入れなかつた伊月はとてつもない疎外感に襲われていた。ここが現代の世界ならばそれでも話しかけることができただろう。初対面の人と仲良くなることも苦手ではなかつたはずだ。しかし、この世界に来てからはどうも受身になりがちだつた。この一ヶ月間、伊月がほとん

ど店を出なかつたのもそれが理由だ。

( やっぱり、吾郎太くんに着いてきてもらうんだつた )

朝の勢いはすっかり衰え後悔の気持ちでいっぱいだった。あの明るいしつかり者の少年がいてくれたら、と仕様のないことを考えてしまふ。少しだけ、市で会つたシイノが来ていないかと紅色の着物を探したが、来ている子どもは吾郎太より少し大きい男の子が一人いるだけだったので、ため息をついて隅のほうで大人しくする事にした。

その様子をしばらく見ていた男が一人近づいてきた。ぼさぼさの髪を下の方で適当に結んでいる。三十半ばくらいのいかにも男盛りの彼は、自分は『あいた検め衆』のまとめ役だと言つた。

「娘さん、町で見ない顔だが……。もしかして今日が初めてかい？」  
気遣うように話しかけられて、はじかれたように顔を上げた。

「はい、そうです。私は山本屋の伊月といます」

「山本？ ああ、扇子の」

初め男は首をひねつたが、ややあつて納得したようだ。すると、別の男が近寄つてきて話に入つてきた。

「山本屋つていや、記憶を失くした娘の面倒みてるつて聞いたが、あんたがそうかい？」

烏帽子えぼしをかぶつた男が、まとめ役の男の肩に寄りかかり、伊月の顔を覗き込むようにして聞いてきた。

「そう、です。あの、初めて参加するので、よく分からないことばかりですが、一生懸命頑張るのでよろしくお願いします」

緊張したまま勢い良く頭を下げた娘を、一人は愉快愉快と豪快に笑い、一人は苦虫を噛み潰したような顔をした。対照的な二人の様子に、何か間違つた挨拶をしたんだろうかと首をかしげると、烏帽子の男がくく、と笑いをこらえて、

「おまえさん、さてはお美代に何も聞かされずにここへ来ただろう。まあ、そう固くなりなさんな。やることは、ただの見回り、だからな」

と言った。が、なにやら含みを持たせた言い方だ。

「おい」

「俺は兵四郎。塗師ぬしの兵四郎っていやあ、分かるだろ。おい、お前も自分の名前くらい言ったらどうだ」

まとめ役の男をさえぎって自己紹介をすると、強引にまた彼に話を振った。まとめ役の男はいつものことなのか、諦めた表情で伊月の方へ向き直った。

「はあ、俺は蔵助だ。そこに船着場が見えるだろ。あそこで荷卸しの仕事をしている。今日は、まあ、兵四郎の言う通り気張らずにやってくれ」

苦笑した彼にぼん、と肩を叩かれた。そのまま蔵助は橋の前に立ち、集まった者たちに向かって声をあげた。

「よし、今日の検めはこの面子で行う。では、それぞれ四、五人の組をつくってくれ」

すると、彼らはそろそろと動き出しちよつとの間に組が五つできた。不思議なことに、女の子のグループは二、三人ずつで三つに分かれていた。皆で一緒に行動するのだと思っていた分、少々奇妙に思える。しかし、四つのグループがそれぞれ四、五人で集まった中、伊月のいるグループは三人だけだ。伊月と杖をついたおじいさん、そして先ほどの男の子。兵四郎は中年の男性のみで組まれたグループにいた。自分のグループが余りものを集めたような気がするのは伊月の考えすぎだろうか。それを見た蔵助が僅かに顔をしかめた。

「おい、そこ六人もいらんだろ。一人あっちへ行け」

ぐるりとまわりを見渡して、とあるグループで視線をとめて言った。確かに男女三人ずつで六人いる。女の子たちは渋ったが男子が一人、

「では僕が」

と、あっさり伊月のグループに入っていった。背の高い清潔そうな青年だ。彼も他の男子と同じく袴を穿いて、小太刀よりも短い腰刀こしかたなを差している。伊月がぺこり、とお辞儀をすると向こうも返してく

れた。

蔵助の指示で伊月の組は、またせ橋からまず北門へ向かう順路で町の端を見回ることになった。巡回を始めてすぐに、初めて参加する伊月のために簡単な自己紹介をすることになった。これは、老爺の提案だ。

「では、わしから。わしは富吉。皆からは富爺と呼ばれておるよ」

富爺は皺だらけの顔をさらに皺くちやにして笑った。聞けばこの富爺、若い頃から彼これ50年以上『検め衆』に毎月欠かさず参加しているらしい。

「すごい、ベテラン……じゃなくって、『検め衆』の大先輩なんですよ」

「ん？ 何、ただのしゃばりなジジイじゃよ。同年のヤツは皆家に引っ込んで、息子や孫に行かせておるからなあ」

うっかり外来語を使いそうになったが聞き流してくれたようだ。本当に元気なお爺さんで、杖をついているとはいえ足取りはしっかりしている。それを見れば家でじっとしているのは似合わない気がする。すると、伊月の後ろを歩いている少年から声があがった。

「富爺はこの町一番の足駄あしだ作りなんです」

「一番長く作り続けているだけじゃわい」

少年の言葉に富爺は軽い口調で返した。

「あの、あしだってどんなものですか？」

伊月がふと思った疑問を口にする。すると、少年は目をこれでもかとまん丸にし、富爺は杖をカランと落とした。しまったと思ったがもう遅い。先頭を歩いていた青年も肩が一瞬跳ね、顔を見ずとも驚きの表情が伝わってくる。さっそくやらかしてしまった。伊月はいよいよお美代や吾郎太に接するように聞いてしまったことを反省し、どうすれば切り抜けられるかを必死に考えていた。山本家の三人は、伊月が世間の常識に疎いことを知っているので一から快く教えてく

れたが、この人たちはどうだろうか。もう成人した人間が、幼稚園児でも知っていることを聞いてくるようなものだ。頭のおかしい人と思われたかもしれない。頭が真っ白になって、涙が出てきそうだと凍りついたような空気に俯いてしまうと、

「まあ、足駄は履かない人の方が多いですから。あれは、放下師や山伏などが好むものですしね」

と、前方から優しい声が落ちた。青年は転がった杖を老爺に手渡して伊月に笑いかけた。

「でも、知らないなんてことはないのでは？」

少年が怪訝な顔で青年に反論した。

「まあ、娘さん。確か山本の大吾の家で世話になつとるんじやろ？ 噂では随分遠い所からきたそうじゃの。足駄の流行らん村も国もあるわい。結構、結構」

少年を宥めて、富爺は本数の少なくなった歯を見せて笑った。少年はあまり納得していないようだが、大人二人が言うので諦めたのだろう。

「足駄は、ほら、富爺が今履いているでしょう」

はあ、と分かりやすいため息をついて少年は言った。富爺の足元をみると、草鞋ではなく二本歯の下駄を履いている。「これは、孫が初めて作ったやつじゃ」と富爺はからん、と音を鳴らした。

「あ、下駄のことだったんだ」

確かにこれを知らないといったら驚かれるだろう。

「ほう、お前さんの国ではこれを下駄というのか。そりゃ分からんわの」

ひとまず和んだように思える雰囲気、伊月はほつと胸をなでおろした。

「では、続きといきましょうか。僕からでいいかい？」

青年が聞くと、少年は「どうぞ」と答えた。伊月も別にかまわないのでこくと肯いた。

「僕は、塚河光之助コウノスケです。富吉さんとは逆で、僕は数年振りに加わ



ります」

「覚えておるよ。大きくなったの」

「お久しぶりです。また、よろしくお願いします」

光之助が深々とお辞儀をすると、彼の一つにまとめたまっすぐな髪がさらりと前に落ちてくる。その姿を富爺は懐かしそうに目を細めて見ていた。後ろで少年がその様子を訝しげに見て、

「失礼ですけど」

と、口を挟んできた。

「塚河といえは代々武士のお家柄だと存じ上げておりますが、なぜそのような方が『検め衆』などに加わるのですか？ 庶民の集まりのようなものではありませんか」

「君は」

「私は研師見習いの戌親いぬちかです」

「そうか、戌親。確かに塚河の家は武士の家系だ。けれど、武家とは名ばかりの下級武士だし、僕自身は庶民から養子になっただけの人間だ。そんな僕が町のために尽くすのは悪いことだろうか」

光之助は戌親に諭すように言った。二人とも少し複雑な顔をしている。確かに、小さい腰刀だけとはいえ彼だけが帯刀していたし、服も土蔵で見たような質の良いものを着ていたのは伊月も不思議だった。まさか武士だったとは。ここへ来てから気さくで温かい人たちばかりに出会ってきたが、やはりこの世界も過去の日本のように身分制度が厳しいのだろうか。

「いえ、ただ……。見回り以外の別の意図があるのでは、と思っただけです」

ぼちゃん、とすぐ脇の水路で魚が跳ねたのと同時に、ポツリ、横を向いて戌親が言った。ただ、あまりに小さな声だったので聞き取れたのは伊月だけのようだ。光之助は「え？ なんだい？」と聞き返したが、何でもありませんと戌親は言い直す気はないようだった。光之助もそれ以上話を続ける気は無いようで最後に、

「まあ、あまり家のことは気にせず接してくれないか」

と言って話を締めた。

最後に伊月が蔵助にしたように名前と店の名前を言って全員の名前を己紹介は終了した。

川原に生えた狗尾草エノコケサがさらさらと揺れる音がする。それほど道中は静かだった。

『検め衆』の仕事と言うのは、昨夜の『影映り』で何か町に異変が無いかを確かめることである。伊月たちもベテラン検め衆富爺のもと、何か変わったことが無いかあちこちに眼を向けながら歩いていた。皆、あれは昨日までなかったとか、あそこの木が無くなっているだとかを言い合い、それを光之助が帳面につらつらと書いていく。伊月はその帳面を少し見せてもらった。和紙を綴った記帳にはミミズがのたくったような字が書かれている。

「君が書いてみるか？」

と、筆を渡されたがまだ筆で書くのには慣れていないので丁重にお断りした。筆を持つのは小学生のお習字以来だし、くずした草書に至ってはさっぱり分からない。山本家で大吾に少し手習いをしてもらっているが、日中は仕事があるし、夜は明かりがないのであまり進んでいないのだ。

「あれ、これって……」

伊月はあることに気が付いてその部分を指差した。草書で書かれていても知っている漢字はかろうじて読めるものがある。

「これ、『影映り』のことですよ。『うつり』って水に映るとかの『映る』の字じゃないんですか？」

そこには、『影移り』と記されていた。大吾から聞かされたときは『映る』の字の方を使っていたと思ったが、違うのだろうか。

「ああ、それは見える方の『影映り』だ。川や池に『月下辺』を見たことはあるか？ それが『映る』という字を使うんだ。この『影移り』は文字通り物が移動した時に使う字だ。言葉では分からないけど、記録として残すときは使い分けるんだ」

「へえ、なるほど。確かに意味としてはこつちがしつくりきますね」

あの自己紹介の後も光之助は変わらず伊月に接してきた。武士といえは偉ぶった横柄なイメージが伊月にはあったが、本人が元庶民

と言ったように彼自身はとても謙虚で対等に接してくれる。ただ、戌親とはまだぎくしゃくとしていた。戌親は光之助とあまり関わらないようにしている。それは伊月と接するときも同じで、会話はしてくれるがどこか刺々しさがああり、目を合わせてくれることは無かった。現に今も富翁と一緒にかなり前の方を離れて歩いている。

今伊月たちが歩いているのは、町の一番外側の小道である。小道の横には水路が流れており、竹でできた高い垣根が立っている。伊月は知らなかったが、この垣根は町をぐるりと一周していて、野党や獣から町を守っているらしい。今のところ、目立った大きな被害はでていないと話していると、富翁の声が聞こえてきた。

「おう、お前さんたち。ちょっとこっちへ来なさい」

少し先で富翁が手招きをしている。ちょうど水路が垣根の下を潜り外へ流れていく辺りで富翁と戌親が待っていた。伊月と光之助は小走りで彼らの元へ向かうと、呼ばれた理由がすぐに分かった。

「これは……」

光之助が驚きの声をあげ、伊月も目を見張った。

垣根を押しつぶすようにして巨大な大岩が存在している。三メートルくらいの高さはあるだろうか。こんな物一体どこから運んできたのだろうか。

「一昨日まではありませんでしたから、これも『影移り』でしょう」「だろうな。こんな大きな物は久しぶりだ。」

「え？ これも『影移り』の仕業ですか?!」

戌親と光之助の会話に伊月はさらに驚いた。確かに、毎月こんな事が起きれば困るだろう。町の人たちが満月を厭うのも無理は無い。「ああ、そうだ。まあ、民家じゃないだけかもしれません。八尺、いや一丈はあるか。すぐに蔵助殿に報告した方がいいだろう」

言うやいなや、光之助は伊月に帳面と筆を押し付けて、もと来た道を風のように走っていった。

「早い……。もう見えなくなっちゃった。私たちはどうしましょうか」

振り向いて富爺と戌親を見ると、戌親は履物を脱いで川を渡り岩の方へ行こうとしているところだった、富爺は道の端に座り込んでいる。

「まあ、ここで待つほかないじやろう。今日の検めはこれだけになりそうじゃしの」

「そうですか」

「うむ、あれは早くどかして直さんと、野犬の群れが入ってくるかもしれない」

そうは言っても、ここにはクレーン車もダンプもないのに運び出せるのだろうか。そんなことを考えていると、戌親がざざざと浅瀬を渡って戻ってきた。

「あ、戌親くん。どうだった？」

「どう、とは？ 別に見たままでしたが」

冷ややかに返されてしまった。彼は伊月を一瞥することなく川から上がり、草鞋を履きなおした。やはり、避けられているようだ。

「だれも下敷きにはなっておらんかったか？」

「富爺、縁起でもないことを言わないでくださいよ。大丈夫でしたよ」

ふざけた口調の富爺を、大きな猫目で睨み付ける。彼は一番年下で口調も丁寧だが、相手が誰でも言うことはしっかり言うのだろう。戌親の返しにほほ、と老爺が笑う。なるほど、先ほど岩に近づいたのは人が巻き込まれていないかを確認しに行ったのか、と感心している、波打つポニーテールを揺らして戌親がこちらに近づいてきた。吾郎太より少し大きい戌親は、目の前に立つと丁度伊月の目線の位置に戌親の頭のとっぺんがくる。戌親はそのまま正面に立ち、「私は母上から聞いたんです」

と言った。まっすぐこちらを見てくる戌親の気迫に一瞬たじろいだ。が、何のことだか分からない。何も反応を返さない伊月にいらだったのか、戌親はさらに強い口調で言い寄った。

「しらばっくれなだけでください。ひと月前の望月の日です。北門か

ら五町ほど行った先で、化け物を見たところ  
「あなたのことですよね。そう言いつ戎親の声がどこか遠くで聞こえた。」

真つ白になつた頭では、碌な返答が出てこなかつた。しかも、ようやく搾り出した声だつて掠れている。

「何……？ ば、けものつて」

こちらに来てから、年下に気圧されてばかりだ。本当に自分はどうしてしまつたのだらう。こんなにおどおどするような性格ではなかつたのに。

「化け物は化け物です。あの日、夕暮れ時にどこからともなく突然女が現れたのを見たと母上が言いました。見た目はただの若い女だつたが、足を出した奇妙な衣を身に纏つていたと。翌日、山本屋にその奇妙な女が入つていくのを見たとも言つていました。母上は、あれはきつと『月下辺』から来た化け物に違いないと今も怯えているのです」

間違いない。それは伊月だ。でも、化け物ではない。自分は人間だ。ぶるぶる震える身体を押さえて、何か言い返さなければと必死に言葉を探す。

「でも、私は……。化け物なんか、じゃ」

「化け物かどうかはともかく」

大きな猫目がぐつと近づく。

「この町で何かするつもりなら許しませんから」

そう言つて戌親は富爺の側へ向かい、腰を下ろした。険しい表情の戌親に富爺が何事かを尋ねているが、彼は口を閉ざしている。富爺が困つたようにこちらを見たが、笑い返す余裕は無かつた。

それからどれくらい経つただらうか。十分のような気もするし一時間以上経つていような気もする。光之助は未だ戻らず、異様な沈黙を誰か壊してくれないかと思つていると、思わぬ人物がそれをぶち壊した。

「あら、光之助様はどちらにいらっしゃるの？」

鈴の音のような愛らしい声が横道からやってくる。声をかけたのは、組み分けのとき光之助が始めに入っていた組の娘だ。鮮やかな桃色の小袖に身を包んだ彼女は、あちこちに視線をやりながらこちらへやってくる。その姿を見ながら、伊月はまたせ橋に来たときを思い出した。確か彼女は、あの女の子グループでも話しの中心にいなかったか。

そんな彼女を戌親は鬱陶しそうに見ていた。それは伊月を見る時とはまったく違った色をしていた。戌親は伊月に対して嫌いというよりも、強い警戒心をもっているようだったが、彼女を見るあの目はあからさまな嫌悪だ。目は口ほどに、というがあんなに分かりやすいとは。

「光之助殿は蔵助殿のところじゃよ。あの大岩を知らせにのう。じきに戻ってくるじゃろう」

笑みを浮かべたまま富爺は娘に返した。娘は肩を落として、「そう、じゃあいらっしゃるまでわたしもここで待っているわ」

と言って、髪を念入りにいじり始めた。一人で来たのか他に女の子たちはいない。思い切って話しかけてみようかと近づこうとしたが、戌親が視界に入って足が止まった。不自然に足を止めた伊月に、「ねえ」と娘の方から話しかけてきた。

「あなた名前は？ 初めて会うわよね。わたしたち」

「あ、うん。私は伊月。山本屋に今お世話になっているの」

少し声が小さくなってしまうが、ちゃんと返すことができた。

娘はふーん、と伊月の全身を上から下に眺める。その視線に何か変な着方でもしてしまっただろうかと自分の姿を見直す。今の装いは木賊色とくまきの小袖に梶子くちなしの帯だ。どちらもお美代のお古なので少々くたびれているが、それでも目立った汚れもないし落ち着いた緑と黄色の色合いが気に入っていた。

「ふふ、別にどこも汚れちゃいないわよ。ただ、もつと明るい色の小袖とかが似合うんじゃないかなあって思っただけ」



そう彼女はくすくすと笑った。もつと明るい色というが、結婚して子どももいるお美代は、彼女が着ているような可愛らしい色合いのものは着ないので、自然伊月の着物も大人しい色が多くなる。新しい物は欲しいが、居候の身で贅沢はできない。なんと答えてよいか分からなくて黙ってしまったが、彼女は気にしていないようだった。

「わたしは巴よ、伊月ちゃん。仲良くしてね」

にこつと笑いかける巴に、伊月もよろしくと笑い返した。それからしばらく町の新しい甘味屋やら、今流行の小物などの話をした後、ところで、と巴が話を変えた。

「光之助様とどんなお話をしたの？」

「え？ どうって、普通に今日の検めの話とかだけど」

さつき来たときも光之助を気にしていたが、知り合いなのだろうか。

「嘘言わないの。あのまとめ役の所為で一緒の組になれなかったんだから、それくらいのこと聞いたっていいじゃない」

そう言う巴は耳まで真っ赤だ。もしかしなくても、巴は光之助に惚れているのだろう。

「好きな色とか、好みの女性とか、何か聞いてないの？ 今日のわたしの格好何か言ってなかった？」

矢継ぎ早に聞いてくる巴に、たじろぎながら「なに」とだけ答えた。すると、巴は鬼気迫る表情で、

「もしかして、あなたも光之助様狙いなもの!? だから、わたしには何も教えられないとかそういうこと？」

と、捲くし立てた。

「ち、違う。違うってば。それは絶対ないから」

「嘘おっしやい。下級とはいえ武家の方よ、女ならお近づきになりたいに決まっているわ」

「そうかもしれないけど、私はちがうから!」

半ば叫ぶように言うと、しびしび巴は引き下がった。武士という

のは、この世界での一種のステータスなのだろうか。とにかく、伊月にはあまり興味の無い話だ。方法は分からないが、いずれは現代に帰るつもりでいるのだからここで恋愛をする気はないのだ。巴に恋敵認定される前に誤解を解いておかねばと、深呼吸して話し出そうとしたところで、

「いいかげんにしろよ!」

と、声があがった。

伊月も巴も驚いて声の方へ顔を向けると、戌親が立ち上がって拳を握り締めていた。

「『検め衆』は遊びじゃねえんだ! 町のためについてみんなで集まってるのに、やれあの女が好みだ、やれあの男が格好良いだ、勘違いしてんじゃねえ!」

戌親は大声で叫び、気が昂ぶっているのかはーはーと肩を上げ下げしている。始終丁寧に話す戌親だったが、今はすっかり乱暴な言葉遣いになっている。怒鳴られた巴は伊月と同じように目を丸くしていたがすぐに、ふん、と鼻を鳴らした。

「何よ。お子様は引っ込んでなさい。あんたにはまだ早いのよ。それに、見回りだってちゃんとしてるし、文句言われる筋合いはないわ」「じゃあ、なんで一人でこんなとこいんだよ。あんたの組はもつと向こうだろ。男会いたさに抜け出した奴が、立派に仕事してるって? 笑わせんな!」

戌親の返しに巴は顔を赤く染めて、唇をわなわなと震えさせた。

「そ、それは……。わたしの組はもう終わったのよ!」

そのまま、二人は喧喧と言い争いを始めた。伊月は止めに入ることも出来ず、腰を下ろしたままの富翁のもとに助けを求めに行った。「あの、止めたほうが……」

「ん? 放っておけ、放っておけ。年寄りにはちと荷が重過ぎるわい。それに、ここ最近若い男女が浮かれ取ったのも事実じゃしの」「富翁はぼんぼんと地面を叩いて隣に座るように示した。伊月は隣に体育座りをすると、どういうこと、と話を促した。

「ここ数年の話じゃがの。『検め衆』で嫁探し、婿探しが流行っておるんじゃよ。良縁に結ばれるのはめでたい事じゃが、年寄りが居づらくなるのは困りものじゃのう」

ほっほっほ、と富爺はなんでもないことのように笑った。つまり、若者たちにとつて『検め衆』は向こうでいう合コンのようなものになつていくということか。だから、女の子たちは分かれて組を作つていたのか、と納得する。となると、兵四郎が意味深に言つていたのもこのことに違いない。お美代さんはこのことを知っていて送り出したのだらう、一言いつてくれれば良かったのに。

「まあ、お前さんみたいに純粹に検めに來てくれる娘さんは久しぶりじゃよ。ありがとう」

富爺は目を細めて皺くちゃな手で伊月の頭を撫でた。特に役立つことはしていないのにと、くすぐつたい様な温かい気持ちに包まれて、何も言えずにはにかんだ。

戌親と巴の争いは、光之助と共にやって来た蔵助の二人によって鎮められた。女と子どももの喧嘩なので手が出ることはなかったが、それでも勢いは激しく、大人二人が無理やり引き離すようにして終わらせた。巴と戌親は一切口をきかず、お互いに無視することで荒れる気持ちを抑えたようだ。その後は蔵助が手配したのか、大岩を動かすため町からぞくぞくと力自慢の男たちが集まり、喧嘩後の刺々しい雰囲気は薄れていった。

「後は俺たちがやっておくから、お前たちはもう帰っていいぞ」

蔵助は『検め衆』を一度解散させて娘たちを帰してきたそうだった。

それを聞いて富翁も、老人は足手まといだから、と家に帰って行った。光之助と戌親はそのまま残り、岩の除去作業に参加するらしい。「光之助殿から聞いて、一番でかい荷車を持ってきたがやはり乗せられないな」

「面倒だが、丸太の上を転がしてくつきやないだろ。あーあー、疲れるのはごめんだねえ」

集められた男たちはそれぞれ軽口を叩きながらも手を休めることなく、忙しそうに動き回っていた。戌親も大人に混じってあつちへこつちへと走り回っている。

「はあ、やつぱり素敵だわ」

男たちの働く様子を見てみると、すぐ隣で恍惚とした声が聞こえてきた。見ると、巴がうつとりとした表情で作業を見ている。視線の先にいるのはもちろん光之助だ。

「やつぱり、町の男どもとは違うわね。凜としたお姿はさすが武家のお人だわ」

「巴ちゃん、まだ居たんだ」

「居てはいけないの？ 一人だけ光之助様を独り占めしようだななんてさせないわ」

巴がまだ勘違いをしていることに内心うんざりしながら、作業の方に視線を戻した。岩にかけられた無数の縄を、誰かが連れてきたのか一頭の牛と人間とで引っ張っている。大変そうだがなんとか動きそうだ。

「ぼーん、ぼーん、ぼーん、と町のどこからか鐘が三度鳴った。これは、これから時間を知らせますよという合図で、ここへ来てから伊月は毎日この音を聞いていた。

「あら、もう八つね。昼餉を食べ損ねてしまったわ」

八回鳴った鐘の音を聞いて、巴はお腹を軽く押さえた。

「えーと、九つが12時だから……、だいたい2時くらい？ 私もお腹空いた」

一度時間を意識してしまうと、町内を歩いているときは気にならなかつた空腹感が襲ってくる。

「家に帰る前に『甘茶庵』で食べて行くわよ」

そう意気込んで、巴は一人歩いていった。その様子を見送って、伊月もどこかで食べて帰ろうかと思案する。お昼代はお美代から貰っているの、この前吾郎太といった蕎麦屋にでも行ってみようかと思っていると、巴が戻ってきて腕をつかんだ。

「何でついてこないのよ。あなたも行くのよ、ほらっ」

「へあっ？」

ぐい、と引っ張られて変な声をあげてしまった。それよりも一緒に行くとはどういうことか。

「ちよつと、何つで、私までっ」

「よくよく考えてみれば、光之助様があなたみたいな地味で平凡な娘に懸想するはずなのよね。あなた、さっき『甘茶庵』に行ってみたって言ってたじゃない。そこでたっぷり、私がいかに光之助様を好んでいるのか教えてあげるわ」

確かに、町で新しくできた甘味屋に行ってみたいとは言った気もするが、そんな話は聞きたくない。しかし、伊月の精一杯の抵抗も虚しく、巴に引きずられて『甘茶庵』に押し込まれた。

「あら、そんなことがあったの。良かったじゃないの、友達は大事よ」

土間で夕餉の片づけをしながら、げっそりして話す伊月の話を、お美代は嬉しそうに聞いていた。お美代は一体自分の話のどこを聞いて良かったと思ったのか。甚だ不思議だ。

その後『甘茶庵』では、巴が本当に光之助への愛をこれでもかと語ったのだ。それも暮六つの鐘が鳴るまで。暮六つの鐘は現代のいたい夕方6時くらいを指すと伊月は計算しているので、約4時間も彼女の話聞いていたことになる。せっかく頼んだ評判の団子も、硬くなってしまえば味も分からなくなるといふものだ。どこかで適当に抜ければよかったものを、タイミングをつかめず結局彼女が「あら、もうこんな時間だわ」と帰るまで居座ってしまったのだ。

「友達ではないです……」

自分は巴にとって恋敵ライバルのはずだ。それなのに、甘味屋に誘われるとは思ってもみなかった。でも、悪い気はしなかったと思う。大分一方的ではあったが、女の子と甘いものを食べて、恋の話をするのは久しぶりだったから。

「まあ、どんな子であれ、同じ年頃の子と話すのはいい刺激になったでしょ。店を手伝ってくれるのも嬉しいけど、私たちはあんたを閉じ込めてるわけじゃないんだからね」

「はい。いろいろ気遣ってくれてありがとうございます」

なんとなくばつが悪い。やはり、お美代は自分あまり外に出たがらないことを気にしていたようだ。

「で、で、で」

つつつ、とお美代が側に寄ってきて、にやりと口が弧を描く。

「あんたはだれか、気になる男はいなかったの？」

口元に手を当てて、このお美代にこっそり教えておくれよ、と笑う。

「やっぱり、お美代さん。『検め衆』が合コンだって知ってたんで

すね！」

向かいのこのあいつもいいし、あそこの次男坊もなかなか……、などと一人話を進めているお美代に、伊月はむっとしながら言った。兵四郎もお美代が知っていて黙っている、と言っていたのだ。

「ごうこん？　なあに、それ。別にー？　若い男も来るだろうから、一人や二人良い人ができてもいいんじゃないかと思つてねえ？」  
わざとらしくしらはつくれている。

「私は、そんな気はありません！」

お美代がここまで言うのも、伊月が丁度結婚適齢期だからだろう。未婚の女性というのはあまり歓迎されない。女は夫を持ち、支え、子を産むのが役割であり、幸せである。だから、伊月にも早くそうなつてほしいのだ。行き遅れる前に。ただ、現代で育つた伊月にはとても抵抗があることだ。自分はまだ学生、子どもである。ずっと先だと思つていたものを目の前に出されても戸惑うだけだ。それにいつか帰ると決めているのに、ここで恋人などつくれない。「帰りが遅かつたから、てつきり良い人と一緒だと思つたのにねえ。残念だわ」

ほう、とため息を吐いてお美代は居間の方へ行つてしまった。いつも面倒見の良く、しっかり者のお美代にも困つた面があつたものだ、その後ろ姿を見ながら思う。

「気になる男の人、か」

手に持った茶碗を置いて、ふと思ひ出すのは昨夜の「彼」だった。ただ一度、顔を合わせただけの男ひと。現代の眼鏡をかけて泣きそうな表情をした「月下辺かすかへ」の住人。

「気になる男の人」

恋ではないけれど。

## 立待月に語る 1

あの慌ただしい一日からさらに一日。伊月はまた町に出ている。それも何故か巴と一緒に。

それは、伊月が店で扇子作りの手伝いをしていた時だった。八つの鐘が鳴ってしばらく経った後、彼女はやってきた。伊月は丁度「親あて」という作業をしているところで、両外側に糊で親骨をくっつけるということをしていた。

「こんにちは。わたし伊月さんの友達で巴と申します。少し伊月さんをお借りしてもよろしいでしょうか？」

奥の部屋で昨日さんざん聞いた声が入ったときは、驚いて危うく糊を零すところだった。

「あら、あらあら。かまわないわよ、もう今日の作業も終わる頃だし。伊月はいつも休憩しないから、連れ出してやってちょうだい」  
嬉しそうなお美代の声が聞こえてきて、作業中の扇子を丁寧に置く。

「伊月、友達できたのか」

「よくわかんないけど、とりあえずちょっと行ってくる」

以外そうな吾郎太に後を任せて、戸口へ向かう。そこには満面の笑みを浮かべたお美代と、今日もしっかりおしゃれを決めた巴が立っていた。

「何しに来たの？」

「あら、ご挨拶ね。お誘いに来たに決まっていますでしょう」

「お店の手伝いがあるから」

そう言っ店奥の奥に戻ろうとした伊月を、二つの手が押さえた。

「大丈夫。そろそろお客さんは来なくなるし、後は吾郎太にやらせればいいから」

「お店の方もそう仰っているのですから、行きましょ」

お美代には押し出され、巴には引っ張られ、汚れないための前掛



けを掛けたまま、伊月は昨日と同じようにずるずると引きずられて今に至るのである。

満足そうな巴を横目に、伊月ははあ、とため息をついた。どうして彼女はこんなに自分に構うのだろうか。普通、恋敵には距離を置くものではないか。それとも、ファンクラブのように互いを監視しあうつもりで一緒にいるのか。何にせよ、彼女の勘違いなのだからいい迷惑である。

「ねえ、どこ行くの？」

昨日入った甘味屋を通り過ぎたので、どこへ行くつもりかと巴に尋ねた。巴は小首を傾げて、

「あら、言っていないかったかしら。今日は『茶屋 饅頭』よ。饅頭がおいしいの」と、にっこり笑った。

「私今お金持って無いし、行くなら別の子誘ったらいいんじゃないかな。ほら、昨日もいっぱい友達いたじゃん」

『検め衆』で集まった時の事を思い出してそう言うと、巴は立ち止まっていつも強気な顔を少し寂しげにさせた。

「あの子達とあなたは違う。きつとみんなじゃだめなのよ」  
独り言のように漏らして、また歩き始める。慌てて後を追う、顔を覗きこむとそこには昨日からずっと見ている自信に溢れた巴がいた。

「お金は気にしないでいいわ。突然連れ出したのはわたしだもの。驕りよ、驕り」

先ほどの巴が気になって、結局伊月はこのまま彼女に付き合うことにした。

「『饅頭』はわたしの友達の家がやっているの。おじさまがとても拘っていらして、よく偉い貴族様や城勤めの方も買いに来るのよ」  
また、昨日のようなマシンガントークを聞くのはご免だったが、そんなにおいしいお饅頭が食べられるのは嬉しい。人通りの多い大き

な通りをいくつか曲がって行くと、『饅頭』という文字と饅頭の絵が描かれた木の看板が掛けられた店が目に入った。

饅頭を楽しみに店の前に行くと、戸が全て閉められており、客が中に入っているような様子は無かった。

「あら、おかしいわね。今日は休みじゃないはずなのに」

同じように思っている人がいるのか、店を覗きに来て残念そうに帰る人が何人かいる。巴が戸を叩いて中に呼びかけようとしたところで、中から男の怒鳴り声と女性の悲鳴、ものが壊れる音が聞こえてきた。二人は顔を見合わせ、巴は戸をどんと乱暴に叩き、声をあげた。

「巴です！何かあったんですか？おキヨ、大丈夫なの？」

この町は比較的治安がいいと聞いているが、それでも強盗や人殺しがあるらしい。伊月は人を呼んだほうがいいかと周りを見渡したが、道行く人は関わりたくないのか『饅頭』を避けるように歩き去っていった。すると、今まで閉まっていた戸ががらりと開いて、中から娘が一人出てきた。饅と染め抜かれた前掛けをしている娘は、申し訳なさそうに眉を下げた。

「巴。せっかく来てくれたのにごめんね。今日はお店できないからまた来てくれる？」

その子が巴の友達の「おキヨ」なのだろう。桂包という白い布を巻いたその子は、大人しそうで巴とは正反対のタイプの娘だ。

「そう、じゃあまた来るわ。大きな物音がしたから慌ててしまって

……。こちらも騒いで悪かったわ」

「父さんと姉さんが、ちよっと、ね。大丈夫だから、また来て。あなたも」

おキヨは始終済まなそうにしながら、店に入ってしまった。強盗ではなく家族間のいざこざのようだが、店を休むほどとは結構な大事ではないだろうか。

「お姉さん、まだ諦めていないのね。……帰りましようか」

店の前から離れたものの、なんとなく巴とそのまま分かれる気に

なれなくて、伊月と巴は山本屋の近くの小さな池の前に座り込んでいた。ちよつとした空き地になっていて、開けたところでは子どもたちが鬼ごっこをしている。

「今日は、饅頭もそうだけど、一番はおキヨに合わせるために誘ったのよ。あの子最近元気なかったから。あなたとは気が合いそうだったし、新しい友達ができればちよつとは元気になるんじゃないかと思つて」

池の中の小魚をじつと見つめながら巴が言った。魚は影のところ群れて固まつて動かない。俯く巴の横顔を見ると、伊月はなんだか申し訳ない気持ちになった。

「なんか、ごめん」

「なんであなたが謝るのよ。勝手に連れ出したのはわたしでしょう」  
「だつて、また昨日みたいにむちゃくちゃな話聞かなきゃならないんじゃないかつて最初嫌だったから。そんなこと考えてたなんて知らなくて……」

恋のことになると、自分のことばかり考えている女の子だと思つていたので。自分に近づいてくるのも、何か裏があるんじゃないかと勘ぐってしまったことを伊月は恥じた。巴はくすりと笑つて、  
「それは、わたしも思つたのよ。昨日喋りすぎたつて。悪かったわ」と、立ち上がる。お尻に敷いていた布を、土を払って懐にしまつて伊月を置いて歩き出してしまった。

「え？ 帰るの？ 巴ちゃん？」

慌てて立ち上がる伊月に、ちよつとだけ振り向いて、

「じゃあ、また誘いに来るわ。またね、伊月」

と、手を振って人ごみに紛れてしまった。巴の姿が見えなくなつても、頭の中でいつまでも呼び捨てにされたことが反芻して、伊月はしばらくの間呆然と立ちつくしていた。

元気のいい掛け声があがって後ろを振り向くと、子供たちがちゃんばらごっこをしているようだった。五、六歳くらいの男の子たちは、皆手頃な棒を持って追いかけていたり、罅迫り合いの真似事をしている。その様子を見て、伊月は巴の態度が少し軟化したことを思い出し、笑みを零した。同じ歳頃の女の子と話すのはいいい刺激になる、とお美代は言ったが本当だ。今日は、肩の力が抜けて楽な気がする。別に、山本家の人たちに囲まれることが疲れるわけじゃないが、巴には大分言いたいことを言っていたように思う。『饅饅』のおキヨとは挨拶すらできなかつたが、また落ち着いたら巴と会いに行こう。三人でおしゃべりしたら、きつと楽しいに違いない。

そんなことを考えていると、人の声が風に乗って伊月の耳に届いた。うまく聞き取れないのに確かに届いたと感ずるそれは、いつかの謎の呼び声の時と似ている。一応周りを見渡してみたが、遠くで子どもたちが遊んでいるだけで、誰かが喋っている気配はない。(満月は過ぎたのに……。『影映り』なのかな。吾郎太くんは聞いちゃだめって言ってたけど)

『影映り』で思い出すのは、あの眼鏡の男の人だ。もう一度会いたい気持ちで勝って耳を澄ましてみる。

「るか、るか？」

聞こえた。間違はなく誰かがこちらに呼びかけている。もう一度、今度は聞き逃さないようにさらに集中すると、よりはっきり聞こえた。

「るか、いるか？」

声は正面の池から聞こえてくるようだ。水面をじつと見てみると、不自然に揺れて自分以外の影が映っている。満月の夜と同じ現象だ。気がつくのと、伊月は池の縁に手をつけて影に向かって呼びかけていた。

「いるよ！　ここにいますよ！」

伊月の声に応えるように、ゆらり、大きく水面が揺れて影が形を成した。

現れたのは男だ。髪が短くて、緑色のフレームの眼鏡を掛けている。

伊月も驚いたが、向こうも驚いたようだ。刹那の間。そして、男は微笑んだ。

「誰か、いますか？」

「はい、ここにいます」

ここにいます、と言ったもののその後何を話せばいいのか分からなくなってしまうた。ただ会えたのが嬉しくて、涙が出そうになっていると水の向こうで男は前髪をいじった。

「あー……その、ヘアピンは君のものか？」

あ、と気がついた。自分は「眼鏡の人」と記憶していたが、同じように彼も自分のことを「ヘアピンの人」と記憶していたに違いはない。今日は、慌てて出てきたのでヘアピンをしたまま外に出ているのだ。この間とは着物も違うし、きつとヘアピンは目印なのだろう。彼もあの時は白い夜着を着ていたが、今日はクリーム色の小袖を着ている。眼鏡がまず目印になった。

「うん。私のだよ。ねえ、私伊月っていうの。ケーキはガトーショコラが好き」

「え？ あ、その。俺は満尋。ケーキは……甘いからあんまり好きじゃない」

突然ケーキの話をしたからだろう。彼、満尋は少し戸惑ったようだ。自分でもなんでいきなりケーキなんだと思っただが、彼はちゃんと答えてくれた。ケーキを知っているということは、少なくともこの世界出身ではないだろう。

「君は、現代の人？ 平成って聞いて分かるか？」

満尋は少し緊張した面持ちで聞いてきた。確かに、その質問は緊張するだろう。「平成」と聞いて、伊月は胸の奥が熱くなった。

「分かるよ。私平成生まれだもん。満尋さんは大学生？」

「いや、高3」

「やっぱり年上だ。私は高1だよ」

自分でも浮かれているのが分かる。同じ時代の人と話せるなんて夢みたいだ。きつと周りから見れば、伊月は一人で池に向かって話している変な人だろう。しかし、そんなことはまったく頭に無かつ

た。満尋と話すことが、今は何よりも大事なのだ。

「満尋さんは……」

「ああ、呼び捨てでいい。俺もそうするから」

じゃあ、と改めて伊月は満尋、と呼んだ。今まで異性の人を呼び捨てにしたことなんて無いから、少しくすぐつたい。

「満尋は、今どこにいるの？」 『月下辺』<sup>かすかへ</sup>って所？」

とりあえず、一番気になるのは彼が今どこにいるかだ。『月下辺』が現代なのか、それとも別のどこかなのか。

「『かすかへ』？ ああ、そうとも言うな。あんたはもしかして『やました』って所にいるのか？」

やました。向こうではこちらのことをそう呼んでいるのだろうか。伊月は首を捻った。そういえば、ここがなんという地名なのか聞いたことが無い。その様子を見て、満尋は質問を変えた。

「じゃあ、そっちはどんな所だ。どういう生活をしているんだ？」

それならば答えられる。伊月はここ一ヶ月の間に覚えたこと、見聞きしたことを簡単に説明した。ガスも水道も電気もない。まるで日本昔話の世界に入り込んでしまったようだ。それから、歴史上の偉人をここの人たちは誰も知らないということも話したら、満尋は満足そうに頷いた。どうやら、満尋の所も同じらしい。それから、いくつか満尋と質問のやり取りをすると、

「俺たちは、過去の日本によく似た世界に来たようだ。そっちとこっちも、たぶん同じと見ていい」と、結論付けた。

「一番近いのは室町から戦国あたりなんだけど」

近いだけなんだよな、と満尋はこめかみを押さえた。話をしてみると、この満尋という男は頭がいい。伊月が思いついたままに話をしても、彼なりに上手く頭で整理しているようだし、相手のレベルに合わせて話すことができる。伊月が説明に困っても、一言二言尋ねて答えを引き出していった。

「ところで、伊月は今どこの国にいるんだ？」

満尋は「わくれ」、「みしず」などいくつかの国名を挙げていたが、伊月は聞いたことが無い。扇子屋で働くことに精一杯で、町の外にはちつとも目を向けなかったのだ。申し訳ない気持ちで「分からない」と言うと、満尋は「じゃあ、宿題な。」と苦笑した。

伊月が満尋に出された「宿題」は三つだ。伊月がいる国名と領主の名前、あと元号のような年と日付の分かるものを誰かに聞いてくること。ちなみに、満尋のいる国は「別暮わくれの国」という所だそうだが、「ぼーん」と町の時鐘が鳴る。この世界には時計が無いので、時間はこの鐘の音からしか分からない。一度会話を中断させて、何回鳴ったか数えていると満尋は何か考え込んでいた。

「もしかして、今時鐘が鳴ったか？」

「うん、鳴ったよ」

「捨て鐘の後に何回鳴った？」

捨て鐘とは始めに鳴る三度の鐘のことだろう。「七回だよ」と言うのと、満尋は頬を緩ませた。

「こっちでも今鐘が鳴った。七回だ」

だからどうしたのだろう。七つの鐘が鳴るのは、西日が差しくる夕暮れ時だ。もう、帰れということか。

「違う、そっちとこっちでは同じ時間が流れてるってことだ。時差がない」

あ、と伊月は声をあげた。確かに、向こうがこちらと同じ時刻だったとは限らなかったのだ。それが同じタイミングで同じ時刻を告げたのだから、これは嬉しい発見だ。

「満尋ってすごいね。私そんなこと全然気づかなかったよ」

素直に思ったことを口にすると、満尋は水面の向こうでそっぽを向いた。

「……別に。誰でも気がつくことだろ」

どうやら照れているようだ。赤くなった耳が目に付いて、くすくす笑っているとさらに赤くなった。これ以上笑うと怒られそうだからすぐに止めたが。



時鐘が鳴ったことで、今日はもうお互いに帰ろうということになった。伊月はお美代の手伝いをしなくてはならないし、満尋も用があるらしい。しかし、まだまだ話し足りない。もっと話したいこと聞きたいことがたくさんある。だから、明日の夜、また『影映し』をしようという約束をした。何時、と決めることはできないので、だいたいみんなが寝静まつたら、ということにした。伊月はお美代たちがいるのでその方が都合がよい。

「『影映し』がどういう仕組みかよく分からないから、今と同じ場所です。大丈夫そうか」

伊月はこくと頷いた。池は山本屋から少ししか離れていないから、夜中抜け出して行っても大丈夫だろう。寝る前に、明かりの準備だけしておけばいい。

「また明日。伊月」

満尋がこちらに手を伸ばすと、独りでに波紋が広がった。たぶん水面に触れたのだろう。水面が落ち着くともうそこに満尋の影はなく、小さな魚が横切っただけだった。

## 立待月に語る 4

満尋と話をした翌日。今日は新しく作る扇子もないので、お客さんが来ていない間、伊月は大吾に手習いをしてもらっていた。

墨を磨るところから始まり、筆に浸して紙の上を滑らせる。現代のように紙は大量に消費できるものではないので、書き損じの裏を使わせてもらっている。前に、字は読めるがくずしたものが読み書きできないといったら、大吾はひらがなをまず手本で書いてくれたことがあった。時々筆の持ち方を正されながら、それを見て同じように書いていく。シャーペンと同じ感覚でつい手をついてしまうが、利き腕は机に触れないように、肘を浮かせなくてはいけないらしい。何度か練習したあと、ふう、と一息ついて姿勢を楽にした。手首から肘まで浮かせているのは結構大変なのだ。

「疲れただろう。余計な力が入りすぎている」  
肩の力をもっと抜くように、と大吾がアドバイスをくれる。あまり喋らないが、彼は教えるのが上手だ。もう少し愛想を良くすれば教師に向いているかもしれない。

少し休憩をもらってのんびり足を伸ばしていると、昨日満尋に出された「宿題」を思い出した。

「あの、大吾さん。今更ですけど、ここってなんという国なんですよ？」

大吾は伊月が練習に使った紙を一枚一枚見ていたが、顔を上げて、「ここはワクレの国だ」

と言って、紙の端に「？呉」と書いた。満尋のいる国も「別暮」<sup>わくれ</sup>だったはずだが、これはどういうことだろうか。漢字が違う同名の国が他にあるのかもしれない。伊月は筆を取って、大吾が書いた国の隣に「別暮」と楷書体で書いた。

「これでワクレと読む国や地名はありませんか？」

満尋のいる場所が分かるかもしれない、と伊月は少し期待したが、

大吾はそれを見て首を横に振った。膨らんだ気持ちが一気に萎んでいく。やはり『月下辺』<sup>かすかへ</sup>は、幻のようにここには存在しない場所なのだろうか。

皆が寝静まった頃を見計らって、伊月は外に出た。今は夜五つを少し過ぎたくらいか。この人たちは夜暗くなったら寝るのが普通なので、現代では九時にもなっていないだろう。夕方用意しておいた明かりセットを持って、昨日の池のところまで向かった。幸い月が明るいので、明かりなしでも道が分かる。

しんと静まり返った池のほとりに腰を下ろし、火打石を使って火をつける。石に火打鎌を打ち付けて、何度目かによつと火がついた。その火をあらかじめ魚油を入れてきた皿に移す。

「う、……くつさ」

安い魚油はひどい臭いだった。鼻をつまんでばたばたと空気を仰ぎ、少し皿を遠ざける。明かりは遠くなるが、この方がまだましだ。何か変化はないかと水面を見ると、不意にゆらゆらと水面が動き出した。『影映り』だ。水面をじつと見ていると、影が浮かび上がってきた。

「こんばんは」

現れた満尋の影にそう言うと、向こうも「こんばんは」と返してきた。

伊月はさつそく昨日出された「宿題」のことを話した。自分が今いる国は「？呉」といつて、満尋のいる「別暮の国」とは違う漢字を用いること。今日は天輝四年の八月十八日で、領主は「山下清太義孝」という人物だということ。それを聞いて満尋は考え込んだり、何か思いついたりしたようだが伊月に言うことはなかった。

「満尋は普段何をしてるの？」

自分ばかり話すのもつまらないので、今度はこちらから尋ねてみた。満尋は少し悩んだ後、<sup>オウ</sup>？衆という小さな傭兵集団に所属していると言った。

「まだ、仕事はもらってないけど。今は剣術や馬術……の基本を教  
えてもらってる」

馬術と言ったところで満尋はどこか遠い目をした。何かあったの  
か聞いてはみたいが、本人がなんとも言えない顔をしているのでや  
めておく。代わりに自分が、こちらに来てから扇子屋でお世話にな  
っていることを話した。扇子作りは奥が深いこと、お世話になつて  
いる山本夫妻がとても優しいこと、二人の息子の吾郎太に妹扱いさ  
れている、などの話を満尋は目を細めて聞いていた。

「伊月は、いい人たちに出会えて良かったな」

心からそう思っているのか、満尋はとても優しい顔をしていた。

「うん」と頷いて、「満尋もそうでしょう？」と聞いたたら、ほんの  
少しだけ笑顔が翳った。？衆の人たちは、満尋に辛く当たっている  
のだろうか。水面の向こうの彼は慌てて違うと否定した。

「？衆の人たちは、本当にいい人達ばかりだ。あの人達がいるから  
今の俺がいる、と思う。男ばかりだし、莫迦で変な奴も多いけど」  
「……そっか」

そこで会話が途切れてしまった。夜風が流れてきて、皿の灯を揺  
らす。何か話題は無いだろうかと頭を働かせていると、先日行った  
『検め衆』のことを思い出した。

「そっだ、満尋のところは『影映り』で物がなくなったりしない？  
こっちはこの間……」

あんなことこんなこと、まるで小さな子どもが、母親に一日の出  
来事を話すように伊月は満尋に話して聞かせた。同郷だというだけ  
で、こんなにも心を許せるとは思わなかった。しばらくして、皿の  
火がずいぶん小さくなった。油がもう切れかけている。

「もうそろそろ寝た方がいいな」

明かりが弱まったのが向こうにも分かったのだろう。満尋は苦笑  
してお開きにしようと言った。その時になって、ようやく自分だけ  
ぺらぺらと話しすぎてしまったことに気付き、伊月は紅くなった。  
これでは巴のことが言えない。気を悪くしただろうか満尋を見た

が、表情からでは何も分からなかった。

「明日も『影映り』できるか？ちよつと実験したい」

満尋は実験の内容を簡単に話した。この間気になった、同じ場所以外でも繋がるかどうかだ。伊月は、山本家に内緒で『影映り』をできそうな場所は、ここ以外に思いつかなかったため、満尋が今日とは違う場所から試してみることになった。『影映り』が失敗した時のことも考えて、明後日はお互い今日と同じ場所にしようと決めた。

「よし。じゃあ、また明日。……上手くいけばな」

「うん、またね。おやすみなさい」

「……おやすみ」

昨日と同じように、満尋が手を伸ばして『影映り』を終わらせた。影が完全に見えなくなったのを確認してから、火を消し山本家へ戻る。

三人を起こさないようにこつそり布団に戻ってから、『影映り』で現代が見えると考えたことを思い出した。

（これって、案外「はずれ」てはいないよね）

『月下辺』の人間を通して、現代を感じているのだから。

夢の中に月は出ぬ 1

今日は市が出る日だといつので、伊月は買出しを任された。吾郎太も伊月に友達が出来たことを知ってか、あまり過度な心配はしなくなつた。

市場は相変わらずたくさんの人で賑わつており、豆売り、魚売りと順にまわつて買つていく。売りに来ているのはほとんど女で、皆世間話も交えつつ買い物を楽しんでいるようだ。最後に野菜売りのところで野菜を買う。現代で見たことあるものから、初めて目にする山菜まで様々なものが置いてある。それらをいくつか買つて籠に入れてもらつと、すぐ向かいの豆売りのところに見たことのある顔があつた。

「おキヨさん？」

振り向いたのは「茶屋 饅頭」のおキヨだつた。おキヨは豆の入つた袋を受け取つてこちらへやつて来た。

「一昨日、巴と一緒に来た子よね。この間はせつかくいらしてくれたのに、ごめんなさい」

向こうも伊月のことを覚えていたようだ。客を追い返すような形になつて、気にしているのだろう。「少しお話しませんか？」と控えめな誘いを受けた。

「伊月さん、よね。巴から聞いたわ。私を元気付けるために来てくれたつて。それなのに……」

「えつ、あの、気にしてないから、大丈夫。私もまた会いたいなつて思つてたところだから！」

歩きながら話をしていると、おキヨはだんだんと暗い表情になつていく。これは自分から話題を振つた方がよさそうだ、と伊月は考へると何か共通の話題はないかと頭をめぐらせた。結局、思いついたのは天気の話か、巴についてだつた。

「巴ちゃんはよくお店に行くの？」

「え？ あ、ええ。いつも一人で来てくれるわ」

巴の話を振ったのは正解のようだった。ぱつと顔を明るくさせると、巴が何を頼んだとか、どんな話をしてくれるのかなどを話してくれた。

「私、あまり外行かないから……、いつも面白い話を持ってきてくれるの」

恥ずかしそうに頬を染めると、おキヨは下を向いた。話をしてみて分かったことは、おキヨは数日前の自分に良く似ていたことだ。消極的で、他人に対して遠慮しがち。巴は自分とおキヨはきつと気が合う、と言ったが、たぶんそれに気付いてのことだろう。

「お店が忙しいと中々外に出れないよね。あ、じゃあ、おキヨちゃんも光之助様の話を巴ちゃんから聞いたりするんだ」

性格的にきつとこの子と同じ経験をしただろうな、と思って聞いてみると彼女は目の色を変えて、今までとは違う、少し強気な態度で伊月を見た。

「巴、光之助様の話をしたの？ 好きって？」

「え？ あ、うん」

「そっか。……そっか……」

おキヨは少しずつ寂しげな表情になっていく。これは拙いことを言ってしまったかもしれない。異性の話をして暗くなるなんて理由は一つに決まっている。

「ご、ごめんね。おキヨちゃんも光之助様のこと好きだなんて、私、知らなくて……、えっと巴ちゃんには言わないから……だから……」  
恋の大三角形を作ってしまったかも、と慌てる伊月に一瞬きよんとしてから、おキヨはくすくすと笑い出した。ふふふ、と口元に手を当てて「ごめんね」と言う。

「違うの。……ふふ。私は別に光之助様に懸想などしていません。

あれはそういう意味ではなくて」

「おい！ あれ、影憑きの妹じゃあないか」

突然、下品な男の声がおキヨの声を遮った。見ると烏帽子をかぶ

った男が何人か、こちらをにやにやとした表情で見ている。着物を見たところ、武士ではないが裕福な町民である。彼らを一瞥したおキヨは眉をひそめ、そのまま立ち去ろうとしたが、尚も男たちは大声で喋り続けた。

「まったく、影憑きだなんて可哀想になあ。いつまでも嫁にいけないんじゃないか、親父さんも心配でたまらないだろうに」

「この間の望月も影に向かって一人、あられもないことをしていたんだろうよ」

「いいねえそりゃあ、ぜひ見たかったな。もしかして、お前も姉と同じことをしてたんじゃないか？」

この男たち、立派なのは身なりだけのようだ。影憑きがなんなのかは分からないが、ひどい侮辱のなのだろう。おキヨは怒りと恥で白い顔が真っ赤になっている。卑しい表情を貼り付けた男たちは、おキヨを舐める様に見ていた。吐き気がするようなその視線と言葉に、伊月もふつつと怒りが沸いてくる。その中で、神経質そうな男が一人前に出てきた。

「丁度良い。君の姉君に伝えてくれ。お前のような女を娶るのは私ぐらいのものだと。父君を早く安心させたいだろう？」

「あ、姉は影憑きなどではありません！」

「ふん、まあ良い。色よい返事を待っているぞ」

そうして言いたいことだけを言って、男たちは踵を返し去っていった。しかし、残されたほうには奇異の目が待っている。伊月とおキヨは逃げるようにしてその場を後にした。

「ご、めんね。家の、ことに、巻き込んでしまって……」

走るだけ走って、気がつけば随分と離れたところに来ていた。周りは家がまばらに立ち、小さな菜園や田んぼがあるだけ。ただ、その分人通りはほとんどない。

「えっと、さっきの、影憑きって……」

まだあがったままの息をなんとか整えて、おキヨのほうを見た。



「姉さんは……！ 姉は影憑きなんかじゃないの。本当よ。信じて……」

伊月の小袖にすがり付いて必死で姉の潔白を訴えるおキヨに、影憑きのことは聞けなかった。おキヨの背をとんとんと叩きながら、「大丈夫。あんな奴の言うこと信じるわけないじゃん」

と言う以外にできることはなくて、それがなんとも歯がゆかった。しばらくすると興奮状態が落ち着いたのか、するりと袖を握っていた手が離れた。

「あの方は土倉の若旦那なの。昔から、姉に言い寄っていて。最近、いつまでも振り向かない姉に腹を立てて、あんなことを……」

「……最低だね」

好きな人の悪口を言えるなんて、どうかしている。しかもあんな往来で。名前も知らない男たちに怒りが再燃してくると、また胸の辺りでなにかが燻るような、焼けるような感覚に襲われた。なんとなくここへ来た最初の日を思い出したのだ。誰も自分を相手にしてくれなくて、近寄ってくるのは下心のあるものばかり。初めて受ける不当な扱いにどうしてよいか分からなかった。おキヨやお姉さんも同じ気持ちなのかもしれない。

それからお互いに何かを発することはなかった。伊月は深く踏み込んでよいものかどうか判断つかなかったのだ。なにしろおキヨとは今日初めて言葉を交わしたのだから。また次合った時に笑顔で一緒にいてあげることが最善のような気がした。それでもこの胸の気持ちの悪さは取れることがなく、山本家には暗い顔をして帰っていた。

## 夢の中に月は出ぬ 2

憑く、という言葉はたいてい神や靈的なものが人間に降りることを指す。そして憑かれた者は、気を狂わせたり、人智を超えた行いはじめたりするものだ。だから、何かに憑かれた者はどうあつても人から敬遠される運命にある。

「影憑きか。影ってことは『影映り』<sup>かすかへ</sup>に関係してるんだよね」

影に憑かれる。影というのが『月下辺』<sup>かすかへ</sup>の住人のことだとすると、向こうの人達はこちらの人間に憑いたりする、ということだろうか。今のところ、『月下辺』にいる満尋に取り憑かれるようなことはないが。

「伊月、なんか悩み事か？」

店仕舞いのため暖簾を下ろして戸締りをしてしていると、中で片づけをしていた吾郎太が傍に寄ってきた。吾郎太はこの間お美代が仕立てた藍色の小袖を着ている。ここでは常識のようだし、影憑きのこと、吾郎太に聞いてみようか。

「今日ね、市に行ったでしょ。そこで知り合つた子の家族が影憑きって言われてて……」

あんまりな酷い言い様に頭きちゃった、とあの気持ちの悪い男たちを思い出して言うと、吾郎太は眉間に皺をぎゅっと寄せた。十歳の子どもがする表情とは思えないほど、深く刻まれたそれにぎよつとする。

「影憑きい？ 伊月、そいつとあんまり関わんない方がいいって。前に言つただろ？ あんまり『影映り』の声とか聞いちゃ駄目だつて」

伊月の持っていた暖簾を受け取ると、くるくると畳んで端に寄せた。軽い言い方だが吾郎太も、あの男たちと同じように影憑きを良く思っていないようだ。吾郎太は両手を腰に当てて、子どもを叱るような口調で言った。

「伊月、俺あの時なんて言ったか覚えてるか？」

何故だろう。だんだん吾郎太が兄のように見えてくるのは。最初からずっとこうだったから、自分の方が感化されてしまったのだろうか。

「え、あの時って……？」

「なんで、聞いちや駄目かってこと！」

あの時とは、初めて聞いた『影映り』の声に、耳を傾けてはいけないと注意された時だ。四、五日前の記憶を思い出しながら、吾郎太の言葉を辿っていく。

「えーと、なんだっけ？ 連れてかれちゃう、から？」

確かそんな話だったはずだ。吾郎太は伊月の答えを聞いて満足気に「そう！」と力強く答えると、仁王立ちのまま腕を組みなおして話を続ける。

「影憑きっていうのは、言いつけを破って向こうに連れてかれた人達のことなんだ。おれは伊月にそうなって欲しくないから、口をすっぱくして言ってるんだ。分かるか？」

これは正座でもして聞いたほうがいいのだろうか。「はい、分かります」と自然と敬語で返すと、うんうんと吾郎太は大仰に頷いた。それにしても、連れて行かれたのなら、その人はもうこちらにはいないはずではないだろうか。吾郎太も本当かどうか分からないと言っていた気がする。言い伝えや伝承には子どもに言い聞かせるために、わざと大げさに話を膨らませたものがあるが、これもそのような話かもしれない。おキヨの話でも、お姉さんはまだ一緒にいるような感じだ。

「でも『月下辺』の人達も、こっちと仲良くしたいのかも」

「駄目ったら、駄目！！」

しれないよ、と続く言葉は吾郎太の叫びにかき消された。この話はまだもうおしまい！ と、吾郎太は伊月を引っ張って、板間のほうへずんずんと向かう。夕餉の支度をしていたお美代と大吾が、不思議そうに二人を見てきたが曖昧な笑顔で誤魔化した。お美代にまで叱

られたくはないし、大吾にいたっては言葉が少ないだけになおさら怖い。小さなお兄ちゃんに叱られている方がまだマシなのだ。

虫の声が響き渡る夜五つ、伊月は前日同様こつそりと山本家を抜け出した。夕方吾郎太に言われた手前心苦しいが、同じ現代人である満尋に会いたい気持ちは変わらない。実際満尋と会って話をして、憑かれるというようなことは何も起きなかったのだ。満尋も伊月をどこかに攫おうとは考えていないようだし、問題ないだろう。今日は昨日のように喋りすぎないように自制を誓って、明かりセットを片手に池へ向かった。

今日は満尋が違う場所から試してみると言っていた。とりあえず、用意していた油が切れるまではここで待っていていようと決めて火を灯す。むわつと魚の生臭い臭いが辺りに漂う。皿の七分目まで入れた油なら、だいたい2時間ぐらいは持つだろう。

池の縁に腰掛けて、魚油の臭いに耐えながら『影映り』が始まるのを待つ。そもそもどういった原理で起きるのかさっぱり分からないのだが、変化を見逃さないようにじつと水面を見つめる。時折飛び込んでくる虫を適当に払いながら待ち続けるも、水面は風に揺らされることもなく静かなままだった。それでも伊月はじつと待ち続けた。

冷たい湿った土の感触に、伊月はふと目を覚ました。ぼーんと控えめな鐘の音が聞こえてくる。

「もしかして、私寝ちゃった？」

寝ぼけ眼で周りを見渡すと皿の明かりはすっかり消え、空に浮かぶ月はほぼ中天に昇っている。髪の毛や着物に付いた土を手探りで落としながら、ほとんど反射のように数えていた鐘の音は八回。現代の時間で計算すると。

「嘘！ 夜中の2時？」

一気に目が覚めて慌てて池の中を覗き込んだ。

池の中は魚も眠っているのか、何の気配もないただの黒い穴である。僅かに月の光を反射しているがたいしたものではなく、光は闇に吸い込まれている。

「もしもし？ もしもーし？」と伊月は小声で池に呼びかけてみるが返事は無い。どうしよう、という思いが伊月の頭の中をぐるぐる回る。上手くいかは分からない、と満尋は言った。でも、もし満尋の呼びかけがあつたのに気付いていなかったら。メールですぐに謝れるわけではないのだ。向こうが怒って『影映り』を止めてしまえば、どんなにこちらが望んだとしても、話をする事にも、会うことも二度とできなくなる。

明後日はお互い同じ場所で、と決めた。もう今日の話だが。お願いだから今夜は会えますように、と神でも仏でもない誰かに強く祈った。

「あら、やだ。ほんとう、切りにくいわねえ」

とんとんとん、という規則正しいお美代の包丁の音が途絶えた。隣を見ると、まな板で葱を切っていたお美代が包丁を睨み付けている。

「研いでみたらどうですか？」

伊月はよく母親が切れにくくなった包丁を自分で研いでいたのを思い出した。この世界の包丁はとても重いので、切れにくくなると料理の余計な手間だろう。伊月の提案にうん、とお美代は唸る。

「そうねえ、やっぱり本職の人に頼もうかしら」

お美代が切った葱を持ち上げると、七夕の紙飾りの様に繋がっていた。

繋がった葱入りの朝餉を食べた後、伊月は吾郎太と共に女ばかりの行列に並んでいた。手にはお美代から預かった包丁がある。

「自分で研げばいいのになあ」

頭の後ろに両手を当てる吾郎太が言った。面倒そうに言っているが、今回は吾郎太が伊月に付いて行きたいとお願いしたのだ。

「やっぱり玄人の人にお願ひしたいんだって。吾郎太くんだってそれが目当てなんですよ？」

吾郎太はばれてた？ とペロリと舌を出しておちやらせる。刃物を扱うプロの研師は、この年頃の男の子にはちよつとした憧れらしい。刀を含め、刃物には昔から人を魅了する力があるという。それを「研ぐ」という職人にはきつと特別な精神力が必要に違いない。吾郎太が間近で見たがるのも分かる気がする。

さて、研師には二種類あり刀を専門に研ぐ刀研師と、それ以外の包丁や鋏、鎌などを研ぐものがある。伊月たちが用のあるのは後者なのだが、彼らは店を構えているわけではなく、日中は道中を歩き

回って商売をしているので、丁度近くに来たときに研ぎをお願いするのだ。この辺りの地区を廻りに来たのは久しぶりのようなので、伊月たちが行った時には随分と長い列が出来上がっていた。

「これ、昼飯に間に合うかな？」

丁寧な職人なのか中々列が短くならない。吾郎太も退屈してきたのか落ち着かない様子だ。あまり遅くなるようならまた今度お願いしようかと話していると、視界の隅でボロ布が道に落ちてあるのが見えた。ゴミは滅多に落ちていないのにおかしいと思っていると、それがもそりと立ち上がった。

それは人だった。

モップのような髪の毛に、元の色が分からなくなった着物は着ているというより引っ掛けているが正しいだろう。骨と皮だけの体からは筆舌し難い悪臭を放ち、陽炎のように立っている。

周りはその人を無いものとして処理していた。時々その悪臭に顔をしかめる人はいるが、通りすぎる人も、ここに並んでいる人も誰もその人を「見て」いない。吾郎太は伊月の視線に気付いたようではと手を握った。

「あいつきつと茶河さかわから流れてきたんだ。目、合わすなよ」

小声でそつと囁くと、伊月の手を放した。「茶河って？」と伊月も小声で聞き返すと、隣の国だと吾郎太は言った。

「今、茶河はその隣の丹万たんまと戦してるんだ。だから村を焼かれたりした奴が、あちこちに逃げて来てるんだ。身一つで逃げてきても、その後の生活なんてたかが知れてるのにな」

吾郎太の考えはシビアだった。ここで助けないのか、などは問わない。この世界の人間は徹底して現実主義者なのだ。というのも、自分たちの最大の敵はいつも現実にあることを知っているのだから。いつ壊れるかも分からない日常を慎ましかに生き、それに満足し、時に諦めているのだ。だから、村を焼かれたのは自分達ではどうしようもないこと。しかし、その後を生きていくのは自分達でどうにかしていくこと、としっかり線引きしている。だから、あのボロ布

を纏った人物に情けをかけるようなことはしない。自分たちが生きるので精一杯だし、きりが無いからだ。冷たいようだが、精々頑張つて生きてくれと祈るぐらいだろう。と、伊月はここまで考えて疑問が出てきた。

「たかが知れてるなら、どうしてお美代さんや大吾さんは私を助けてくれたの？」

身一つだったのは自分も同じである。ましてここでは変わった服を着て常識知らずなのだから、普通は見捨てるなり売りに出すなりするのではないだろうか。

「ん、たぶん綺麗だったから、じゃないか？」

少し考えた後、吾郎太は言った。綺麗というが、自分は特別美人ではないし極めて平凡だと思うが、美醜の基準が違うのだろうか。

「顔が、じゃなくて手とか足とか。今はそうでもなくなっちゃったけど、初めて会ったときはお姫様みたいな手だったよ」

伊月は水仕事やらでかさかさになった自分の手を見た。掌の皮も少し厚くなり硬くなった部分もある。

「あんな白くて綺麗な手をしてたら庶民とは思わないよ。きっとやんごとない身分の人で、きちんとお預かりしなきゃって思ったんじゃない？ まあ、結局は身分も何も無い普通の女の人だったわけだけど……」

にやり、と意地悪く笑つて吾郎太は伊月を見た。分かつてはいるしその通りなのだが、はつきり普通と言われると腹が立つ。ちよつと大人びているならお世辞くらい言つたらどうなのだ。

「長いことこの国は戦をしてないって父ちゃんが言つてたけど……」  
表情を一転させ、吾郎太は不安そうな顔をした。「みんなで世界平和」を唱える世界ではないのだから、いつこの国にも戦の火種が舞い込んでくるかは分からない。可能性としてはありえない話ではないのだ。伊月には戦争といつてもいまいち現実味のない話だが、それは遠い海の向こうの話ではなく、今確かに忍び寄っているものなのかもしれない。



## 合わない半月 2

吾郎太と戦の話になって思い出したのは、この間の『影映り』で満尋と話したことだった。

前々回、途中で寝てしまうという大失態を犯してしまった伊月だったが、結局あの日は満尋の方も上手くいかなかったらしい。いつも『影映り』が起きる、予兆のようなものが無かったというからそうなのだろう。これで分かったことは、決まった場所でない『影映り』ができないということ。お互いにあの場所に向かい合わないと話すことはできないようだ。

それにしても、『影映り』で見た満尋は顔色が悪かった。暗くても判ったくらいだから相当だろう。口数も少なく、結局また伊月ばかりが喋ってしまった。本人が言ったわけではないが、何でもいから話してくれ、と言われてる気がしてどうでもいような日常のことまで話していた。時には現代のことも交えて。満尋のいる<sup>のすい</sup>？衆は傭兵集団だというから、きつと危ないこともするのだろう。仕事の話詳しく聞いたりはしないが、きつと現代では経験しないような辛い事があったのかもしれない。それでも最後は笑ってくれたから、ちよつとは力になれたのだと思う。

さすがに毎日には会えないのだが、今日は『影映り』の約束をしているので、その時は元気な顔をしていると嬉しい。

「伊月？ もうすぐ回ってくるぞ」

吾郎太の言葉にはっとして前をみると、前に並んでいるのは一人だけ。どうやら昼餉には間に合いそうである。意外と早く回ってきたなと思つたら、お弟子さんも加わっていたらしい。小柄な体系はまだ子どもものようだ。緩く波打った鬚はどこか見覚えがある。

「あつ」

思わず大きな声をあげてしまい慌てて口を押さえたが、出たもの

は戻せない。研師の男とその弟子がゆっくり顔を上げた。

「つあなた」

顔を上げたのは『検め衆』で一緒だった戌親だ。そういえば、研師に弟子入りしていると言っていたが、ここで会うとは思わなかった。

「何？ 伊月の知り合いか？」

意外そうな吾郎太に、この間の『検め衆』で一緒だったことを話す。へえ、と吾郎太は納得すると、「仲良くなれなかったのか？」と聞いてきた。恐るべし十歳の観察眼。確かにこの間の一件で少々、いや、かなり気まずいのだ。

戌親は一瞬だけ眉を顰めたがすぐにその表情を引っ込め、「何を研ぐのです？」と問うてきた。さすが商売人。公私混同はしない。伊月はお美代から預かった包丁を渡すと、戌親はゆっくりそれを眺めて砥石で研ぎ始めた。

「久しぶりだね。元気だった？」

知り合いなのだから挨拶くらいはしようとした。戌親は顔を上げぬまま「ええ」と答えた。素っ気無いが一応返事はしてくれる。戌親には化け物と言われたが、誤解だと分かってくれば仲良くしてくれるだろうか。

「今日もいい天気だね。……手馴れてるけど、いつからお師匠さんについたの？」

「……八つの時です」

「そっか」

誰かコミュニケーション能力を分けてくれないだろうか。もともと自分は話し上手ではないのだ。中途半端な会話にさらに気まずい思いをしていると、隣から吾郎太が口を挟んできた。

「おい、集中してるにしても、もうちつと愛想良くしろよ。伊月はお前と話そうとしてんだろ。気付いてんなら何でそれに返さねえんだよ」

その言葉にぐっと戌親の肩に力が入った。事情を知らない吾郎太

は必死に伊月を助けようとしているのだろう。一方的に戌親を責め立てる。伊月は慌てて止めにかかったが吾郎太は止まらなかつた。何も知らないものが聞けば吾郎太の言っていることは正論なのだが、伊月は何故戌親がそのような態度をとるのか知っているのか、とにかく居た堪れなかつた。

すると隣で作業をしていた研師の男が、戌親の手元を見てぎよつとした。

「おい、戌つこ！へこんでんじゃねえか、馬鹿たれ！！すまんねえ、お嬢ちゃん。手前が直しやすんで、ちよつと待っていてくんねえか。戌親、お前はもういいからお嬢ちゃんとケリつけてこい」

研師の男は唾を撒き散らしながら戌親を怒鳴りつけると、伊月と吾郎太にはぺこぺここと烏帽子を被った頭を下げる。そして、戌親からお美代の包丁をひったくると「まったくなんてことしやがんだ」と殊更真剣に研ぎ始めた。

研師の男に叱られ追い遣られた戌親は、「すみませんでした」と師匠と伊月に謝りその場を離れた。

悔しそうに去っていくその背中を慌てて追いかけると、少し離れた所の軒先で戌親が待っていた。伊月は彼の目の前に立つと、思い切り頭を下げた。

「ごめんなさい。私が話しかけたりしたから怒られちゃったんだよね。本当にごめん！！」

後から吾郎太がやってきて、伊月の隣に並ぶと「おれも悪かつた！」と一緒に頭を下げた。例えまだ一人前でなくとも、一人人の仕事を奪ってしまった責任は大きい。通行人が何事かと三人を見やるが、伊月は戌親が何かを言うまで頭を上げるつもりは無かつた。すると、頭上で戌親がふうーと息を吐き出す。

「二人とも頭を上げてください。お客さんと話をするのも仕事のうち。それができなかつたのは私の落ち度です。あなた方に非は無いた。その言葉に二人は頭を上げて戌親を見ると、今度は彼が頭を下げた。

「大事な預かり物を駄目にしてしまうところでした。師の腕前は確かです。どうか、それだけは信じてくれませんか」

弟子の評価はそれを教えている師匠の評価でもある。伊月は端から研師の腕も、戌親の腕も疑ってはいるが、「分かりました」と言つて戌親の頭を上げさせた。

「よし！ お互い謝つたんだからもうこれでお相子だな。で、なんでお前は伊月を邪険にしてたんだ？ 理由があるのか？」

すつきりしたとばかりに吾郎太が破顔する。遠慮なく質問できるのは子どもの特権だろう。そう言われた戌親は少し悩んで伊月の方を見た。

正直伊月自身話にくいことではある。山本家の人間は、伊月がこの世界に来た直後のことを知らない。何も無い場所から突然現れたなんて聞いたら、どんな反応をするだろう。

戌親が遠慮がちにぼつぼつと話す内容は、以前伊月に向かって言った内容とほぼ同じだった。化け物と言ったことで吾郎太はとても頭に来たようだが、それ以外は冷静に話を聞いていた。戌親があらかた話を終えると、吾郎太はぶるぶると肩を震わせた。伊月は何を言われてもいい覚悟で吾郎太に向き合つと、彼はそれはそれは盛大に笑い出した。

「はははっ……伊月が……化けもんとか、悪さつて……くくっ。何それ、おっかし……ふふふ」

腹を抱えてそのまま転がりそうな勢いの吾郎太を、伊月と戌親は啞然とした表情で見ている。今の話で爆笑の壺など無かつたはずだが。はー、はーと苦しそうに呼吸をすると、ともすればまた火が点きそうになるのを堪えて、吾郎太は戌親に向かって言った。

「つく、くく。ふう。あー、笑つた。それは無いって。突然現れたのが本当だとしても、伊月が化け物とか町に危害を加えるだとかありえないよ」

「何故そう言い切れるのですか」

自信満々の吾郎太に戌親は納得できない様子だ。それは伊月自身

是非とも聞きたいところである。なぜ、自分を信じてくれるのだろう。

「だって、こいつすっごいおっちょこちょいだぜ？ 初めて家に来たときなんて、小袖の裾を何度も踏んで転がってたし、水の入った桶も重くて持てないもんだから自分で頭から被ってたよな？ あれは母ちゃんと思議だ不思議だ不思議だって言ってたんだ」

その後も出てくる出てくる失敗の数々。よくもまあ、覚えていたものだ。伊月は真っ赤になって「もうそれくらいでいいよ！」と叫んだが吾郎太の口は回り続ける。

「後は……あ、扇子の地吹きの際に息吐きすぎて気を失いかけただろ？ かまどに火を点けられなくて、その日の夕餉が抜きになったのが山本家最大の危機だったかもな」

穴があつたら入りたいとはこの事である。もういつそ自分で掘ってしまおうか。「今はちゃんとできるよ」と蚊の鳴く声で呟いたのを誰か拾ってくれ。蹲って顔を隠す伊月の頭を吾郎太はぽんぽんと叩いて、「まだあるぞ。聞くか？」と戌親に聞いた。戌親は大層哀れみのこもった目で伊月を見つめると「いえ、充分です」と言った。

今日の仕事はもう仕舞いだと、夕日で紅く染まった研ぎ道具を片付ける師匠を戌親はそつと見つめた。自分が不揃いにしてしまった包丁は、この熟練の研師が綺麗に直し持ち主へと返した。あれから師匠とは口を聞いてもらっていない。何せ師の客を少し預かるようになってから始めての大失態である。無言で片付ける師を見ながら、悪ければ破門されるかもしれないと緊張していると、道具を背負った師匠が「ケリはついたか」と尋ねた。すぐに伊月という女性のことだと思いついて、「一応は」と答えた。自分の疑問が消えたわけでは無いし、母の言葉を疑うつつもりはないが、あの一緒に居た少年の所為でなんだか真剣にあの女を警戒していた自分が馬鹿みたいに思えた。

「珍しいじゃねえか。客の前であんな無愛想になるなんてよ。……あの娘つこが『月下辺』<sup>かすかへ</sup>からの化け物かい？」

「……!!!」

何故それを知っているのか。自分は師匠にその話をしたことは無いはずだ。

「客と話をするのも仕事のうちつつつただらうが。まあ、見る限り噂なんて当てになんねえもんだな。……戌っこ、自分の心で感じたことは大事にしるよ」

師匠はそう言って歩き出した。自分の心で感じたこと。そんなこと言われてもよく分からない。あの少年はそれを大事にしたから、あんなにはつきりと言い切れたのだらうか。思い出すのは、顔を羞恥で真っ赤に染めて、自分よりも年下の少年に子供扱いされる年上の女性。やっぱり馬鹿馬鹿しい。道の途中で立ち止まった戌親を「おい、早く来ないか」と遠く離れた師匠が呼んでいる。「すぐ行きます」と答えて戌親は走り出した。

町の人間がほとんどに眠りについた頃。揺ら揺らと浮遊する微かな炎が、子ども頭の頭ほどの高さで滑る様に移動している。たまたま起きて外を見た人がいたら、火の玉が出たと驚くかもしれない。実際は、伊月が灯明皿を持って歩いているだけなのだが。月の出が随分と遅くなったので、夜道を照らすのは星明りしかないのだ。伊月は火の点いた皿を引っくり返さない様十分に注意しながら、池のある空き地へと向かっていた。

いつもの場所で満尋を待っていると水面が揺らめいた。しかし、揺蕩う水面に中々満尋の影は現れない。「満尋？」と声をかけると、ややあつて漸く姿を現した。

「……ちよつとおかしくない？」

開口一番、伊月は首をひねって疑問を口にした。今日の『影映り』はなんだか変である。少しぼやけているというか、要するに「画質が悪い」。おまけにノイズがはしるように、影がぶつぶつ途切れるのだ。満尋の方も同じ状況のようだが、すぐに原因を思いついたようだ。「ああー」と気の抜けた声を出した。

「月の所為じゃないか？」

「月？」

「『影映り』は満月の日が一番起こりやすいらしい。ってことは、新月に向かつて欠け始めたら、反対に起こりにくくなるってことだろ？」

なるほど、それなら納得がいく。月の満ち欠けが影響しているのかと、伊月は空を仰ぎ見るが、残念ながら月はまだお休み中らしい。その様子を向こう側で見ていたのか、満尋は頬を緩めると、

「今日は確か半月だったな。帰る頃には見えるんじゃないか？」

と言った。伊月はその顔を見てほっと安心した。この間見せた暗い表情は消えて、すっきりしたような顔つきだ。きつと、その不安の

種は解決したか乗り越えるかしたのだろう。ただ、その顔が「画質が悪い」ばかりに良く見えないのが残念だ。

「そういえば、『影移り』で物が無くなったりするのは満月の日だけだね」

「ん？ そうみたいだな」

「やっぱりそれって、そっちとこっちを行き来してるのかな？」

こうして『月下辺』と影を映しあっているのなら、そう考えるのが自然だろう。ここの人たちも同じように考えているようだし、『月下辺』とここは『影映り』によって繋がっているのだ、と伊月は確信していた。伊月の疑問に満尋は「そうなんじゃないか？」と、至極どうでも良さそうに答えると「ややこしいな」と呟いた。

何がややこしいのかというと、「こっち」とか「あっち」とか「そっち」とか、呼び名のことらしい。確かに、いつもこそあど言葉ばかりだ。伊月が向こうのことを『月下辺』と呼んでいると言ったら、満尋は伊月のいる方を『やました』と呼んでいると伝えた。

「月夜の里で『月夜里』やましたというらしい。月が関係しているのは間違いないさそうだな」

「ほんとだ。『かすかべ』も月の下の辺り、だしね。『月下辺』の人も『月夜里』の人と同じ事考えてたんだ」

そう思うとなんだか可笑しい。なんでみんな『影映り』を怖がるのかと不思議がっていると、伊月はふと思いついたことがあった。そういえば、大吾は満月の日にしか『影映り』はできない、といったような話し振りではなかったか。実際は満月が過ぎてもこうして『影映り』ができるのだから、自分の記憶違いか、もしくは彼の思い違いだろうか。

「そうだ。同じ部屋のやつが昔『影移り』で大事な櫛を失くしたと言ってたな」

「大事なものと見つからないのはショックだよな」

『影移り』で無くなるのは、永遠に見つからないのと同じだ。誰かからの貰い物であったり、思い入れのある物であればさぞや悲し



いだろう。

「そうだ。じゃあ、満尋の物が無くなったら私が預かっておくよ！」  
名案とばかりに口にすると、水面の向こうで満尋は力が抜けたようだった。

「…………それは返してもらえるのか？」

「あ」

満尋はやれやれと肩を竦めると、「もっと考えてから口に出せよ」と溜息と共に吐き出した。

「う…………じゃあ、帰ってから、返す」

苦し紛れに言葉を絞り出すと、それにも首を振られた。

「だから！ どうやってここに来たか伊月は知っているのか？  
俺は突然だったから、原因とか何も分からない。だから、帰り方も分からない。そもそも帰る方法なんてあるのかすら分からない。それでどうやって帰ってから返すんだ」

一息に言った満尋はどこか苦しそうだ。この世界へどうやって来たのか、知らないのは伊月も同じだ。帰り方だって分からないけれど、それでも帰れると、希望を持っていた方がいいじゃないか。

「帰れるよ！ 来たんだもん、絶対方法はある…………と思う。…………  
無いかどうかは探してから考えようよ」

「…………無いことの証明は不可能だぞ」

黙って俯く伊月に満尋はがしがしと頭を掻いて「悪い」と言った。  
満尋は帰りたくないのだろうか。今はまだ山本家にお世話になりっぱなしだけれど、いつかはちゃんと恩返しして、元の世界へ帰る方法を探すつもりでいたのに。満尋は違うのだろうか。

俯いてしまった顔を上げることができないので、満尋の表情が見えない。

「…………明日も早いから、今日はもう終わりにしていいか？」

「うん」

「次は三日後の、同じ時間でいいか？」

「うん」

「悪かった」

「……うん」

何も言葉が出てこないのは、動揺している所為なのか。

結局、帰り道に月が出ているかを確認することはできなかった。

そろそろ日も中天に差し掛かるといふ大通りでは、今日も物売り達の威勢の良い客寄せの聲が、そこかしこから聞こえてくる。

巴とおキヨは、そこで売られている簪や結い紐を冷やかしながら見ていると、どこからか微かに、木と木がぶつかり合うカラカラという音がする。それは物売りたちの声に掻き消されそうになりながらも、徐々にこちらに近づいてくる。一体なんの音かとそちらを見ると、人ごみの中から一人の行商の女が現れた。

彼女が背負った行李には、開いた扇子と閉じた扇子を模った二枚の木札が掛かっついていて、それがからん、からんと歩きたび小気味好い音を立てている。その行李を背負って俯き加減で歩く女の顔を見ると、それはこの半月程で随分と見慣れた友人の顔であつた。

「伊月！？ あなたこんな所で。お店に行つたけど居なかつたから、ここで会えて良かったわ」

「こんにちは、伊月さん」

伊月はずっと足元を見ていた顔を上げ、声の主が巴とおキヨだと分かると、彼女達のいる小物売りの所へ向かつた。

「お？ 山本屋さんが連雀売りたあ、珍しいねえ」

小物売りの男が扇子の木札を見てそう口にした。連雀売りというのは、今の伊月のように売り歩いて商売をすることだ。行商する者は連雀以外にも、棒に担いで振売りしたり、鮎売りのように頭に桶を乗せていたり、と彼らは様々な姿で町を歩いている。食品から日用品まで、彼らは何でも売っていた。反対に買い取る者もいて、古着やくず紙、灰まで何でも買い歩いている。

「はい、人手が増えたので行商もしてみようと。今日は試しに、秋の新作を用意してきたのです」

伊月はそう男に返しながら、この丁寧な口調を両親が聞いたら卒倒するだろつな、と思つていた。最近では店番もしているから、言葉

遣いには気をつけているのだ。店番の様子は奥の板間で作業をしている時に、お美代の接客を見ていたからなんとなく分かる。これで元の世界へ帰ったら、家庭的かつ礼儀正しくなった自分を見せて、皆を驚かせてやるうと密かに目論んでいた。

「それにしても、下を向いてどんより顔では売れるものも売れないわよ」

小物屋を離れ三人で通りを歩いていると、巴が呆れたように言い出した。おキヨもはつきりとは言わないが、困ったような笑みを浮かべているから、巴と同じ意見なのだろう。確かに、行商をしているものは、皆大声を張り上げて自分の商品を宣伝して回っているのだから、何も言わずにただ歩いているだけの伊月は異様に思えただろう。

「……うん、そうだね」

そう返してみるが、浮かべた笑みは弱弱しいものだった。巴はそれを見てあからさまに溜息をつく。「何があつたのよ」と、巴が言うが、伊月はどうしてもそれを話せなかった。

というのも、伊月の浮かない表情は、三日ほど前の『影映り』が原因である。

「現代へ帰る」ということについて、満尋と考えが合わなかった。気まずいまま別れた後、冷静なってみれば、随分と子どもっぽい態度を取ってしまったと反省したのだ。彼はきちんと伊月に謝つたのに、自分はそれさえもしなかった。人と関係を持つにはそれがどんなものであっても、歩み寄りと妥協が必要である。十人十色、いろんな考えがあるのだから、衝突があるのは大前提だ。だから、お互いに納得できるところで妥協し合うことが必要だったのに。

満尋との関係がこのまま無くなってしまふのは嫌だ。伊月は次に賭けていた。

しかし、三日経ち、いつもの『影映り』の時間になっても満尋は来なかった。やはり気を悪くして会ってくれないのかと青くなるが、

それでも徹夜の覚悟で待ち続けた。日付が変わり、もう夜明けまで数時間というところで、彼は現れた。現れたが水面には何も映らない。ただ声だけが伊月を呼んでいた。

声だけの満尋は随分と饒舌だった。いつもは淡々とした調子で話すのに、あの時は随分と熱があり、それでいてどこか疲れているような感じがした。伊月がこの間のことを謝ろうとすると、「いや、自分が悪かったんだ」と最後まで言わせてくれない。そして、仕切りに「次はいつ会えるか」と約束を取り付けたがるのだ。しかし、新月に向かっていている月は徐々に『影映り』の力を弱めている。今日のように声だけならともかく、顔を合わせるのは大分先になるだろう。何度も、顔が見たい、とうわ言のような言葉が届いてきて、その暗鬱な響きに伊月は始終表情を強張らせていた。

そして、その日を境に声すらも聞こえなくなつた。

満尋のことはお美代達にも、巴やおキヨにも話せないことだ。伊月は無理やりに笑つて「きつと大丈夫だから」と言うしかなかった。実際、自分が思い悩んでもどうにもならないのだ。口にした言葉は、巴にはではなく、自分に向かって言っているような気がした。巴は納得していないようだが、何も聞き出せないと分かつたのか、せつかくだから扇子を見せてくれ、と言つてきた。伊月は道の隅に行李を下ろして、中から扇子を取り出しいくつか見せる。涼しげな夏物とは打って変わつて、秋らしい落ち着いた色合いと絵柄が多い。その伊月の様子をおキヨが青ざめた表情で見つめていた。

「おキヨちゃんも見る？」

伊月が声をかけると、おキヨは、はつとして「ええ」と近づき扇子を手に取る。

「おキヨまでどうしたのよ？ 今日わたしと一緒になのだから心配することはないわ」

巴は金と唐紅の鮮やかな扇子を開いて、そう言い放つ。彼女もおキヨの家の事情を知っているのだらう。「無礼で下品な男どもなど

蹴散らしてあげるわ」と頼もしい。おキヨはそれに「ありがとう」と曖昧な笑みを浮かべた。

「ほら、伊月も客引きくらいしなさいな」

そう巴に発破をかけられ、「扇子はいかが〜」と声を出す。何度も声が小さいと巴に文句を言われながら、伊月は声を張り上げた。

若い娘が二人まじまじ商品を見ていると、徐々に好奇心から人が集まってくる。午前の売り上げがほとんどないので、これ幸いと商売を始めた。これっぽちの売り上げでは山本夫妻に申し訳ない。巴とおキヨは昼餉を食べに行くというのでそこで別れた。二人には今度お礼をしよう、と心に決めると扇子売りとして商売に励んだ。

広げた布に扇子を並べて「扇子、扇子はいかが〜」と大声で叫ぶ。伊月は夏が過ぎては扇子の需要は少ないと思っていたのが、思っていたよりも買い求める者は多く、その多くは富裕層の人間だった。彼らは茶の席で用いる茶席扇や、舞扇を買っていく。プロが作った少し高価な扇子を多く持たされたが、これを見越していたのだろう。

「やや、向こうで女田楽の一行が来ていたよ。きっと扇子は入用だから、あっちへ売りに行ってみたらどうだい」

大分客足が落ち着いた頃、炭を売り歩いていた親切なおばさんがそう教えてくれた。田楽といえば、伊月は真つ先におでんを思い浮かべたが、流行の芸能集団のことである。伊月は「ありがとう」と言って品を片付けると、さっそく行ってみることにした。女田楽というなら、女性が多いに違いない。気持ち安心しておばさんが教えてくれた方向へ向かった。

田楽の一座は、平礼寺に泊まっているはずだと言っていたので、伊月はそちらへ向かっていた。途中商人達が途切れて静かな通りへ入ったが、寺が近づくともたまた物売り達で溢れていた。しかし、今まで売り買っていた通りでは見られなかった、掛茶屋や豆腐売りなどが目立つ。

一間一戸の四脚門を潜ると、境内は外の騒がしさから切り離れたような静寂で満ちていた。町唯一の寺である平礼寺は、小規模な寺ではあるが参拝者は絶えないという。寄棟の本瓦の屋根が乗った本堂の下では、老婆が何事かを熱心にお参りしている。掃除をしていた寺の小僧に、田楽が来ていないかと聞くと、北階の僧房を借りて滞在しているというので案内してもらった。掃除の邪魔にならないかと尋ねれば、田楽の一座が来てから、このように商いをしにくる者が絶えないので構わないらしい。小僧について行くと、奥まったところに建てられた切妻の長い建物が見えてくる。これが僧房らしい。木造のアパートのような僧房に入り、小僧が「瑞香さまは居られますか？」と声をかける。すると、若い女が出てきて奥の大部屋にいるよと言ってまた引っ込んでいった。小僧には掃除があるだろうから、ここままで良いと戻ってもらって伊月はその大部屋へ向かった。

閉められた板戸の前に立つと、伊月は一度大きく深呼吸した。初めての訪問販売はどうも緊張して、心臓が早鐘のように打っている。「失礼します。山本扇子の伊月と申します。扇子は御入用では御座いませんか」

「……ああ、扇子かい？ どれ、待っていたよ。お入んなさい」  
戸の向こうから入室を許可する声が返ってきた。きっとその声の持ち主が「瑞香さま」なのだろう。それにしても不思議な声だ。低めの女のような気もするし、高めの男と言われても頷ける。すつと

戸を開けると、紫煙を纏った美人がそこに居た。

「其処にお座り。白物売りも紅粉解へにときも、帯売りだつて来たのに、扇子が来ないからこの町には扇子が無いのかと思つてしまつたよ」

ふふ、と笑つてその人物は自分の正面を煙管で指し示す。黄色の小袖の上に、鮮やかな猩々緋の衣をゆるりと着た瑞香は、やはり男とも女ともつかない容姿をしていた。伊月はやや緊張した面持ちで瑞香の正面に座ると、「さつそく見せておくれ」と言うので、行李の中の扇子を並べた。お美代には、芸をする人間には舞扇か能扇を見せるようにと言われていたので、それらを中心に見せてゆく。脇息にもたれかかり、立膝について座る瑞香は、それをじつくりと眺め始めた。

その様子を控えめに見ながら、この人物の性別はどちらであろうか、と伊月は考える。女田楽と聞いたから女性しかいないと思つていたが、そうとも限らないかもしれない。現にこの瑞香は男の格好をしているし、仕草も女性というより男性的な気がする。さらに、と音が鳴りそうな黒髪を緩く結った姿は、雅な男性と思つたほうがなんだかしっくりきた。

「お前は亀のように大人しいねえ」

「か、亀!？」

品の一つを手に取り、広げたり閉じたりしていた瑞香が、唐突にそう言つてきた。亀に例えられるなんて、生まれて始めてである。

「まあ、煩くあれこれ薦められるよりは良いがね」

ちらり、と伊月に流し目をくれる瑞香は、目元に紅を差しているせいか随分と艶っぽい。伊月はその視線とまともにかち合つて、かあつと顔が紅くなるのを感じた。それを見て瑞香は、くく、と声を押し殺して笑つと、「これと、これを」と、畳んでも先が広がる中啓の扇子を差し出した。それから、紅葉が描かれたものを指して、

「これを十ほど用意できるだろうか」

と、問うてきた。

「はい、明日で宜しければご用意できます」



「では、そうしてくれ」

上手くまとめられたようだ。思わずふう、と一息ついてしまうと見られていたのかまた笑われた。よく笑う人だ。

「その初々しさが愛らしいねえ。明日来てくれるのもお前だろうね？ 伊月」

戸の向こう側から一度しか名乗っていないのに、彼はすっかり記憶していたらしい。軽口だと分かってはいるが、どうも正面からそのように言われると恥ずかしい。

「……おそらくは」

「おや、ここは是非とも参上する、と言うものだよ？ 客商売で付き合いは大事だ。そうだろう？」

瑞香は口元を三日月に持ち上げた。尋ねる形で聞いてはいるが、これはほぼ断定だ。

「……はい、その通りに御座います」

「では、明日も来てくれるね？」

「是非参上させていただきます」

瑞香はその答えに満足したようだ。「楽しみにしているよ」と笑みを浮かべる。そのまま、彼の視線を痛いほど浴びながら広げた品を片付けて、最後に頭を下げてから部屋を辞した。

嫌いな人間ではないが、どうも自分のまわりにはいたことの無いタイプの人だ。とりあえず、明日も行くことになってしまったからそのこともお美代たちに伝えねばならない。案内をしてくれた小僧がまだ居たので、帰る旨を一言告げて平礼寺を後にした。

消えた三十日月 3

翌日、瑞香に頼まれた扇子を注文通り十本用意して、再び平礼寺へ向かうとなにやら門前が騒がしい。人だかりの向こうから、太鼓や笛の音が風に乗ってやって来る。何事かと近づいてみると、

「いや、流石、瑞香さまの一座は華があつていいねえ」

「春にもまた来て頂きたいよ」

と、いった声が聞こえてきた。どうやら、瑞香たちが一座の芸を見せているらしい。そうこうしている内に曲調が変わり、人だかりの隙間から女たちが、すすす、と出てきたのが見えた。萩や桔梗、女郎花など美しい秋の花々を笠に挿して、白と緑の衣装を身に纏った女たちが、ひらり、ひらりと舞っている。

さあさ 見やれや 稲穂の実る 田の美し

さあさ 我らの黄金こがねを 御覧じろ

踊れや踊れ 歌えや歌え

笛の音 響け 藤の姫まで

女たちの歌声が秋の青空に響き渡り、華やかな舞が始まった。大人も子どもも皆楽しそうにして、その歌と踊りを見ていた。初めて見る一座の踊りには、秋の実りを喜ぶ素直な気持ちがかしこに溢れていた。

「よっ、いいぞ」

と、あちこちで威勢のいい掛け声があがる。歌の邪魔にもならず、タイミングよく掛けられるそれらが、さらに彼女たちの舞に彩を添えていた。

「おーい、伊月」

呼ばれて後ろを振り向くと、吾郎太とシイノが並んで立っていた。シイノは今日も薄紅の小袖を着て、吾郎太の隣でにこにこ満面の

笑みを浮かべている。一緒に居るなんて珍しいと二人を見ると、その手がしつかりと繋がれているのに気がついた。微笑ましくてついにやけてしまうと、吾郎太が真っ赤になってばつとその手を離れた。「別に、これは……その、迷子になったらいけないだろ。だからだ、うん」

「じゃあ、もう少しそうしてた方がいいかもね。まだまだ人が増えるから」

そっぽを向く吾郎太にそう言つてやると、「うう」と呻いて周りを見渡した。歌に釣られて今もたくさんの見物人が集まっている。背の低い吾郎太とシイノはすぐに埋もれてしまうだろう。

「本当、伊月さんの言つとおりだわ。吾郎太！ 迷子になるんじゃないわよ」

シイノはそう言つて伊月の腕をしっかりと掴んだ。ぴったりとくつついた彼女は、

「お久しぶりですね、伊月さん。もつと近くで見ましよう？ 瑞香さまはとても素敵だそうですから、見ないと損です」

と、人ごみを押しのけて前へ前へと移動した。腕を引っ張られたままの伊月は、一緒になって前の方へ流れていく。見えなくなる二人を吾郎太が慌てて追い、無事三人そろつて一番前を陣取ることができた。

「まあ、素敵！ 藤姫さまだわ」

シイノが感嘆の声をあげた。花笠を被った女たちに囲まれて、一人違う衣装の女性が舞っている。頭には藤の花簪を挿し、薄い紫色の桂つばきから萌黄の単ひとへが覗いている。飾り房のついた扇子を広げ、優しい微笑を浮かべる姿はまさに天女のようなようであった。シイノが藤姫に夢中になっているのを見遣つて、伊月は吾郎太の耳元に口を寄せた。

「吾郎太くん、藤姫さまつて？」

「ん？ 藤姫様は国産みの神様だよ。佐香田サノカタノハナヒメ花比売神ヒメノカミつてというのが本当の名前んだけど、みんな藤姫様フジノカミつて呼んでるんだ。歌にも出

てきただろ？」

なるほど、ではあの女性は神様役をしているわけか。上品で優美なその姿は、確かに藤の花の比売神であろう。この歌は田畑の実りを藤姫さまに感謝し、捧げている歌なのだ。

さあさ 見やれや 山の紅くれない 黄羽衣

さあさ 紅葉の散るらん 御覧じろ

踊れや踊れ 歌えや歌え

鼓よ 轟け 朴の君まで

藤姫の隣に、白い長絹ちほひをうちかけた男が現れた。彼は太刀をとって雄雄しく舞い、藤姫が彼に寄り添うように共に舞う。

「お、瑞香さんだ。かつこいいなあ」

吾郎太がほつ、と溜息を吐く。今、太刀を持ち剣舞を舞っているのが瑞香のようだ。彼が現れたとたん、あちこちで女性陣の熱の籠もった吐息がこぼれた。

「ねえ、瑞香さんは誰を演じてるの？ もしかして歌に出てきた朴の君？」

「さあ？ そついえばなんだろうな。朴の君つて歌にもあるけど、結局誰のことか皆知らないんだよな。この後会うんだろ？ だったら瑞香さんの方が詳しいと思うよ」

「ありがとう。聞く、のはどうしよっかな……」

確かに演じている瑞香に聞くのが一番なのだが、彼と会うのは些か緊張する。時間と心に余裕があったら尋ねてみよう、伊月は思った。

「私の演じた役？ 私に興味があるのかい？ 嬉しいねえ」

「……いえ、単に気になっただけです」

舞の演目が全て終わった後、僧房で扇子を渡し、瑞香が演じた役について聞いてみた。案の定、彼は戯れ交じりの受け答えである。

「ふふ、すまない。そう怒らないでくれ。実は私も分からないのだよ」

「え？ 分からなくてもできるものなんですか？」

肩をすくめてそう言った彼に、驚きの声を返す。田楽の衣装から楽な小袖に着替えた彼は、昨日のように脇息にもたれ煙管を吸っていたが、しばし逡巡して灰を落とし、それを置いた。そして、おもむろに立ち上がると、綺麗な布で包まれていた太刀を伊月に見せた。舞で瑞香が使っていたものだ。

「これの鞘にあしらわれている物が何か分かるかい？」

「ずい、と目の前に差し出された太刀を見ると、確かに白い鞘には精巧で美しい彫刻があしらわれている。」

「花……何の花でしょうか」

花卉が八枚。大きく開いた花の中心には、苺のような雄しべと雌しべが付いている。

「朴の木の花だよ。これは、昔からあの役には必ず用いることになっていてね」

「朴の花……」

「鼓よ 轟け 朴の君まで。きつと朴の君なのだろうね、私の役はでも、それだけさ。伝えられていることが不思議な程に何も無い。私に分かるのは、この朴の君は藤姫をとて愛している、ということとだけさ。そして、藤姫もまた、ね」

瑞香はそう言って太刀を丁寧な布で包んだ。共に藤姫と舞っていたとき、確かに朴の君は藤姫を慈しむように見ていた。瑞香は、その思いだけを頼りに「朴の君」を演じてきたのだろうか。

「本当は、一座の者意外にこうして見せることはないのだけれど。こんなことを聞いてきたのは、お前くらいだからね。特別だよ？」

「す、と自分の口元に長い人差し指を当てて、瑞香は目を細めて笑った。いちいち仕草の一つ一つにドキドキさせられる人だ。伊月は紅く染まった頬を誤魔化すように、ありがとうございました、と深々とお辞儀をすると、そのまま瑞香に別れを告げ帰路に立った。」

瑞香の一座は、明日には別の町へ発つというから、もう会うことはないかもしれない。それでも、またどこかで縁がありそうな不思議な予感を感じていた。

### 消えた三十日月 3 (後書き)

一ヶ月も経っているのに今更ですが、こちらで報告したことはないので、改めて。

『月下辺<sup>かすかへ</sup>』のお話を『水面の月〜The Reverse Of The Girl』で連載中です。こちらは満尋が主人公になっております。男ばかりで華が無いですが、時間と興味がありましたら目次下の「月下辺を覗く」からどうぞ。

片っぱし読んでいなくても話に支障はありませんので、ご安心くださいね。

もうすっかり秋も深まり、山々は赤と黄の美しい衣を着けている。農家は稲刈りに忙しくなり、嬉しい悲鳴をあげていた。どうやら今年は、豊作のようだ。山本家の食卓にも、取れたばかりの新米が並び、吾郎太の拾ってきた山栗と炊き込めば、まさに秋の味覚づくしである。

美味しい食事を楽しんだ後は、行李を背負って行商に出る。初めて行商をした一昨日、思わぬ収入に気を良くしたお美代が、これからも行商を伊月に任せる、と言ったのだ。もちろん、伊月は快諾した。最近は扇子作りもほとんど職人に任せているので、家事が済んだら手が空くのだ。居候が働かないわけにはいかない。途中、富翁や塗師の兵四郎など懐かしい面々と言葉を交わしながら、からん、からん、と木札の音を響かせていた。

もう一巡りしただろうか、というところで伊月は池の辺で休んでいた。いつも『影映り』をしているあの池である。行李を下ろしてぼつ、と池を眺めていると、目の前を赤蜻蛉が過ぎ去った。いつの間にか町で見かけるようになった赤い蜻蛉は、そのまま伊月のすぐ隣にやって来て草の先に止まる。

(満尋、大丈夫かな)

『影映り』はまだ起きない。空に浮かぶ白い月は猫の目のように細かった。『影映り』ができなくなつて、もう一週間。最後があまり良い雰囲気ではなかったために、心配だ。

(満尋 って返事はこないか……)

小声でひっそりと呼びかけてみるものの、当然ながら返事は無い。はあ、と溜息をつくのと、驚いたように蜻蛉が飛んでいった。

まだ数えるほどしか会っていないのに、まるで昔からの友人のような気安さで彼とは接してきた。海外へ出かけたときに、偶然同じ日本人に会つと嬉しくなるというが、そのような感じだろうか。こ



この人たちは皆優しくしてくれるし、伊月も山本家の人たちや巴たちは好きだ。けれどもやはり、どこか価値観の違いともいうべき隔りがあるような気がしてしまうのだ。それは、ふとした何でもないような所で出てくる。現代では当たり前のように共感できたし、してもらえた部分で、ここでは誰の賛成も得られなかつたりするのだ。単純にカタカナ表記の外来語が通じないとか、文明利器を知らないとかの話ではない。その人を形成している根本が違うのだと認めざるをえないのだ。

だから、満尋との会話はとにかく安心感が先に立つのだ。

歳も性別も異なる二人だが、それでも彼と伊月に根付いた常識や倫理、価値観は同じだ。個人としての考えは違えど、そこは変わらない。この右も左も分からない世界で、それがどれほど嬉しいことか。たとえ、満尋がこの世界では幻に等しく、現世の者でなかつたとしても、伊月にとっては大切に、けして切ることのできない存在に成りつつあった。

「……みーつひろー、返事しろー」

届かないと分かりつつも、池に向かって小声で呼びかけてみる。

すると、後ろでじやり、と草鞋が土を踏む音がした。

「おやおや。お前さん、つかれたのかい？」

「はわっ!？」

しゃがれた声の誰かが話しかけてきた。あまりに突然だったので思わず肩が跳ねる。振り向くと伊月の真後ろには、墨染めの着物に白い頭巾、尼僧姿の老婆が立っていた。尼はゆっくりこちらに近づくと、たじろぐ伊月を他所に、

「お前さん、つかれているね」

と、伊月を見下ろした。

「はあ、確かに歩き回ったので疲れてはいますけど……」

やにわに何を言い出すのかと、伊月は不審な目で尼を見た。頭巾の下で皺に埋もれた小さな目が、伊月を興味深げにじっと見据える。「そうじゃないよ。お前さん、影に憑かれておいでだ」

尼は掠れた声でそう言うと、「おお、可哀想に……」と数珠を持った手で合掌した。いきなりなんだと腹が立って立ち上がると、尼は数歩後ろへ下がって尚も続ける。

「可哀想に、ここにも哀れな魂がまた一つ生まれもうした」

その声はとても慈悲深いものであったが、可哀想、哀れだ、と初対面の人間に言われるのは不愉快だった。この尼僧に、一体自分の何が分かるというのか。

「さつきから、なんなんですか！　いきなり訳の分からないことを言つて！」

つい、口調が荒くなる。確かに、気が付けば異世界、だなんてこれ以上ない不運ではあるし、なんで自分がと思ったこともある。でも、優しい人達のお陰で、ちゃんと地に足付けて立つことができるようになったのだ。しかも、尼僧が言う、影に憑かれているだとか、身に覚えの無いことだ。ふと、おキヨの姉が影憑きと蔑まれていた事を思い出す。こういう人間がいるから、おキヨやそのお姉さんが謂れ無いことで苦しんでいるのだ。眦を決して尼を睨み付けると、尼は心底残念そうに目を閉じた。

「離れるなら早いほうがいい。お前さんはまだ若い。良い夫はお前の隣に常に居て、お前を母としてくれるのだ」

眉をひそめる伊月に尼は一礼して、静かにその場を後にした。残された伊月は、言われた言葉を頭の中で反芻する。影憑きと呼ばれた。可哀想だとも。それから。

「夫は常に隣にいて、私を　っ！」

勢い良くしゃがみ込むと、膝を抱えて火照った頬を押し当てた。忘れていた。ここでは自分くらいの年の子は、とっくに結婚しているもおかしくはないのだ。

「だから、私はまだ十五で、高校生なんだつてばっ」

お美代にしろ、あの尼にしろ、皆気が早すぎる。影憑きのことも分からないし、一体なんだったのだ。尼の言葉に耳を貸さずに、早く立ち去ればよかったと後悔していると、「何しているの？」とま

た別の声が掛かった。

## 拙の音 2

鈴の音のような声は間違いなく友人のものだ。しかし、振り向いた先には、薄い透けた布を垂らした笠を被った女が一人。顔が分からない。

「巴……ちゃん？」

「そうよ」

頭を抱えて蹲る伊月に声を掛けたのは巴であった。巴は笠の布を手の中で捲り、そこから笑顔を覗かせる。伊月は立ち上がって近づくと、「どうしたの？」と、問いかけた。彼女の姿は、今まで見てきた可愛い明るい色の小袖姿ではない。裾が広がらないよう袴を絡げ、帯は胸の辺りにかけている。太い鼻緒の草履は、まるで長旅でもするかのような装いだ。

「ああ、これ？ わたしもつば装束なんて初めて着たわ」

そう、つば装束だ。遠方から店を訪ねてきた婦人が、そんな格好をしていた。確か、身分の高い婦人の旅装姿ではなかったか。夕焼けのような<sup>そひ</sup>色の袴が、秋の空に溶け込んでいた。

「今帰ってきたところなのよ。少し遠方の神社へお参りに行っているから」

わざわざ遠くまで、何か祈願するような悩みでもあったのだろうか。巴のことだから、恋愛成就のお参りでもしてきたのかもしれない。最近は「光之助様」と言うことが無くなったが、もしかして失恋でもしていたのだろうか。

巴は市女笠を取り、「この笠についてる虫垂衣<sup>むしのたれぎぬ</sup>？ これって結構

便利よ。虫除けになって」と力なく笑うとすぐに俯いた。今日の巴からは、普段のはきはきとした、威勢の良さが感じられない。戸惑いを隠せず巴の出方を窺っていると、草履でぐりぐりと土をいじっていた彼女は、意を決したのか口火を切った。

「……わたしね、もうすぐ嫁ぐのよ。一度だけ会ったのだけど、な

かなかい人だったわ」

「ちよ、と。嫁ぐつて……」

なんて偶然だろう。あの尼は預言者か予知能力でもあるのだろうか。まさか、身近に結婚しようという人が出るなんて。

「え、でも、光之助さんは？ 好きなんでしょ？」

初対面であれだけ愛を語ってみせたのだ。いくら相手がいい人でも、そう簡単に気持ちが変わるとは思えない。そう尋ねると、巴は初めて自嘲的な笑みを浮かべた。

「そうね、“好き”だったわ。養子でも武家の跡取りで、若いし見た目も悪くない。気性も穏やかで、まさに理想の相手。彼なら、わたしの両親も口出ししてこないと思っただの」

ぎゅう、と市女笠を握り締める巴は、伊月の知らない人だった。

彼女の“好き”は、伊月の言う“好き”と、きつとイコールではないのだろう。

「わたしの家は、まあ、それなりに貧しかったわ。農家だったの。でも、それもわたしが十くらいまでの話ね。姉が公家の某様に見初められて、一変したわ」

ぼつぼつと話す巴の言葉を、伊月は黙って聞いていた。彼女の今の生活を考えると、なんとなくこの先が予想できる。きつと、巴の両親は農家としての暮らしを捨ててしまったのだろう。そして、巴にも姉と同じ道を進ませようとしているのかもしれない。

「姉が幸せかどうかは分からないわ。相手とは随分歳が離れていたし、庶民だもの。精々側妻めかけがいいところでしょう」

「巴ちゃんは、その、相手のこと好きなの？」

「さあ？ まだ一回しか会ってないもの。これから好きになるかもしれないし、そうじゃないかもしれないわね」

一度しか会ったことない人と結婚する。伊月には到底受け入れられない話だ。一度でどんな会話ができるというのか。デートだっただけじゃないだろう。「もう、気軽に外へは行けなくなるわね」と、寂しそうな巴を見ると、こちらの胸も苦しくなってくる。

「嫌なら、止めちゃえば」

気付けばそう口にしていた。自分の人生だ。親は大事に違いないが、それで巴が辛い思いをするのは理不尽だ。ましてそれが、贅沢な暮らしを手放したくないという、欲にまみれたものなら、尚更。「結婚なんてまだ早いつて。それに、好きな人つてわけでもじゃないんでしょ？ お父さんとお母さんに言えばいいじゃん。子どもの幸せがなによりなんだから。なのに、巴ちゃんの気持ち無視して決めるなんて、最低だ」

「……そんなことない。わたしのことを考えての結婚だもの。それに、他の子はどんどん夫婦おとめとめになつているのよ？ 独り身なんて、親不孝もいいところだわ。良縁を結んで、親に楽をさせるのが娘としての努めよ！」

巴は伊月の言葉に目を剥いたが、すぐに熱り立ち声を張る。しかし、伊月には彼女の言う、良い暮らしのために男を選ぶ、ということが理解できなかった。

「そんなの、おかしいよ……」

「おかしくないわ。みんなそうよ。わたしは遠くへ行くだけで、他の子ども幼馴染や、そうでなければ、親や町の人間が薦めた相手と一緒になつているもの」

互いに譲れず、視線を合わせることもできずに俯いていると、巴は黙って市女笠を被り、その表情を白い虫垂衣の向こうに隠した。

「やつぱり、あなたは違つたわね。『検め衆』の時も媚探しには興味無かつたし。良い人がいるのかと思えば、そんな感じもしない。女独りで生きていくのは、大変よ？」

震える声が、なんとか気丈でいようという巴の心を表していた。

伊月は、巴の理解を得られないことに唇をかみ締めながら、この世界の結婚観念について考えていた。やはり、ここには独身を貫く女性はいないのだろう。そもそも、独りで生活していく、という考え方が無いような気がする。とかく町では子育てをしながら仕事をしている女性が目立っていた。仕事のできるできないでもなく、年齢

でもない。きつと、男も女も、自分以外の他人を支えて、初めて自立した一人前の大人として認められているのだ。

「どうしてあなたが、嫁ぐことに否定的なのかは分からないわ。でも、いつまでも山本屋さんにお世話になることはできないのよ」

それは、漫然と伊月も思っていたことだ。もう少し自分の歳が低ければ猶予はいくらでもあっただろうが、年頃の娘がいつまでも居候では体裁が悪すぎる。追い出すようなことはしないだろうが、ずっと甘えるわけにはいかないと思っていた。せめて、自分が最低限自活できるようになるまでは、もう少しだけ居させて欲しい。「分かってる。時期をみて出て行くつもりだから」と言うと、「そう」とだけ返ってきた。

「じゃあ、そろそろ行くわね。……文でも出しなさいよ。たぶん、もう会えないから」

それなりの身分の者に嫁ぐのなら、簡単には会えなくなるだろう。人前に顔を出さないのが、彼女たちのマナーなのだから。「うん、必ず出すね」と泣き笑いで答えると、薄い布の向こうで、紅の引かれた口元が引き上げられたのを見た。

巴が立ち去った後、彼女のいた辺りにはそこだけ通り雨が降ったかのように、ぽつぽつと乾きかけた水玉模様が浮かんでいた。

涙で赤くなつた目と鼻が落ち着くまで待つと、とぼとぼと伊月は空き地を後にした。山本家へ戻ると大吾と吾郎太は居らず、店じまいをしているのはお美代だけだつた。伊月は、行李の中から売れ残つた扇子を取り出して棚にしまつと、今日の売り上げをお美代へ渡した。

ここで日常的に使うお金は、穴の開いた銅銭一種類しかない。それを100枚ずつ紐に通して持ち歩くのだ。単位は文。初めは十文と言われても、高いのか安いのか分からなかつた伊月だが、市へ行つたり、行商していくうちになんとなく物価をつかめてきた。今は、一文をだいたい100円から150円くらいとして使っている。ただ、切りが良くて計算が楽だ、と思つたのは最初だけで、たまにビタ銭が混ざつていたりするとこれが厄介だ。質の悪いビタ銭には、当然良いものと同じ価値は無い。100円以下なのだ。しかも、欠けていたらマイナス5円にしろ、だなんてマニュアルは無いのだからその辺の塩梅が難しい。おまけに、意地の悪い人は、いかにバレずにこのビタ銭を上手く紛れ込ませるか、に心血を注いでいるので、気をつけねば思わぬ損をしてしまう。なんの疑いも無く笑顔で受け取つて、帰つてきてみればほとんどがビタ銭だつた、という時には泣いて皆に謝つたものだ。

「大吾さんと吾郎太くんはまだですか？」

夕方には大抵皆揃つているので、二人とも居ないのは珍しい。帳簿に先ほどの売り上げを記入していたお美代は顔をあげて、「そうなのよ」と不満げに声を漏らした。

「あの人は屋号を持つてる奴らの集まりで、そつち。まあ、集まりなんて口実で、酒飲んでるだけだろうけど。吾郎太は、どこかで遊んでるんでしょうよ。まったく、暗くなる前に帰つてきなさいって言つてるのに……」



お美代の言葉に苦笑して、薪を取りに裏へ回る。薪を七、八本抱えて竈にくべると、吾郎太が「ただいま！」と、土間へ顔を出した。顔や着物に泥をくっ付けてきた彼は、今日はどこでやんちゃをしたきたのだろう。

「おかえり、お美代さん心配してたよ？」

「ああー、さつき拳骨もらった。今日は佐助と栄吉と彩にいで、きのこ狩り行ってきたんだ。ほら」

言つや否や、懐やら袖やら吾郎太の着物のあちこちから、ぼろぼろ茸が転がり出てくる。伊月は目を剥いてそれを拾い上げると、両手で抱えるほどの量になった。得意げな吾郎太に「たくさん採ってきたね」と笑いかけると、彼は嬉しそうに歯を見せた。

「吾郎太、あんた布に包むくらいしなさい。袂、土だらけになっていないでしょうね」

濡らした布を持つてきたお美代が、目を吊り上げて吾郎太を見る。ぎくり、と吾郎太は顔を引きつらせ、乾いた笑いが土間に響いた。

「で、でもお美代さん。とてもおいしそうですよ？ 今日これ一品作りませんか？」

色とりどりの両手の茸を差し出すと、少し表情を和らげたお美代が、どれどれと伊月の両手を覗き込む。

「そうねえ、汁物に入れて、あとは干しときましよう」

お美代は三分の二ほどを箆に移して、水を張った鍋を板敷きの間に持つていった。汁物は囲炉裏の方で作るようだ。残った茸を水できれいに洗うと、伊月は竈の火加減を見ながら、「食べて大丈夫なやつだよな？」と聞いた。布で顔を拭いていた吾郎太は、「当たり前だろ！」と返す。

「食べられるのと毒きのこの違いくらい分かるって。それに、彩にいとちゃんと確認したし。全部食べられるよ」

吾郎太がそう言つと、具材を取りに来たお美代が「外で土を払つてらっしゃい」と、土間から吾郎太を追い出した。吾郎太はしぶしぶ勝手口から出ていくと、暫くして外でぱんっぱんつと威勢のいい

音が聞こえてくる。

「あの、お美代さんと大吾さんはどうやって知り合ったんですか？」  
ふと、嫁に行く巴のことが気になって、お美代に二人はどうだったのかを尋ねてみた。里芋の皮を剥いていたお美代は、「ええっ？」と驚くと、ぬめりで滑ったのか芋を下に落つことす。いそいそと芋を拾う耳が紅い。

「そ、そうねえ。知り合ってたっていつても、子どもの頃から一緒に遊んできた仲だったし。子供心になんとなく、いつかは夫婦めおとになるのかしら、とは思っていたけど……」

うーん、と昔のことを思い出しているのだろうお美代は、少し頬を赤らめながら空を見ている。やはり巴の言うとおり、お美代と大吾も、幼馴染がそのままパートナーになったパターンらしい。

「きっかけはなんだったんですか？」  
「……今日はどうしたのよ。いつもはこういう話興味無かつたじゃない。……ええーと、確か大吾が店継ぐときに、嫁に来てくれたって言われたんだったかしら？」

ちょうどあたしがあんだ位の時よ、とお美代は恥ずかしそうに笑った。あの無口な大吾さんからプロポーズ。てつきり押しの強いお美代から言ったものと思っていたから、まったく想像がつかない。

「え？ 父ちゃんから言ったの？」  
伊月の心を代弁するかのように、外から高い声があがった。着物だけでなく頭の土も払ってきたのか、鬘を下ろした吾郎太が戸口で意外そうにしていた。一体どこから聞いていたのか。案外、最初から聞き耳を立てていたのかも知れない。

「そうよ、いざって時に決めてくれるの。格好いいでしょう」  
息子に聞かれて開き直ったのか、お美代は最後盛大に惚気て板間へ向かった。心の中で「ご馳走様です」と呟くと、吾郎太が馴れ初めなんて初めて聞いた、と大きな目をさらに丸くしていた。それから持っていた薪を、足りないと思つて、と伊月に渡し、一緒に火加減を見る。時々火の当たる向きを調節しながら竈の中をいじつてい

ると、「なんで母ちゃんに聞いたの？」と、吾郎太に聞かれた。

「……友達が嫁ぎに行くんだって。それで、お美代さんたちはどうだったのかなって。……幼馴染でいくと、吾郎太くんのお嫁さんはシイノちゃんかな」

ぼつり、そう呟くと、「げえっ!？」と、吾郎太は大げさに驚いた。田楽を見に来た時のことを思い出して、お似合いじゃないかと一人微笑んでいると、吾郎太は胸を押さえて呻いた。

「うええー、何でアイツ!? 止めるよ、おれはもつと優しくして、可愛い嫁さんもらおう!」

吾郎太はそう叫ぶと、「今日の伊月はなんか変だ!！」と板間のほうへ行ってしまった。一人土間に残された伊月は笑って吾郎太を見送ると、ぐつぐつというお釜をじっと見ながらこれからのことを考えた。

本当は、山本家に迷惑をかけないためにも、さつさと自分も嫁いだが良いというのは分かっている。もちろん、自分を嫁にしたいと思う奇特な男がいればの話だが。ただ、そうすると元の世界へは帰れなくなる。新しい家族をつくった後で、彼らを置いて平気でさよなら出来る女性なんていないだろう。それに自分の両親も、友達も絶対に諦めたくない。だから、元の世界へ帰る方法をなんとかして見つけなければ。それでもできるだけ早くに。満尋は諦めているように思ったけれど、帰りたくないとは言っていないかった。だから、自分が諦めずに方法を探せばいい。

燃える竈に薪を足すと、ますます火が強くなる。赤々とした光に照らされた伊月の顔は、決意に満ちていた。

月が満ちていくにつれ、伊月の機嫌は目に見えて良くなっていった。心配していた満尋も、再び顔を合わせた時にはいつも通りである。あの時は、ちょっと仕事が大変でひどく疲れていたただけだ、と本人も苦笑していた。「冗談めかして「事故起こしたって家族に電話しているみたいだよ」と言うと、激しく狼狽していたような気がするが。嘘をつくのが上手いのか、下手なのか。ただ、聞かないでほしい、と雰囲気で訴えるのは得意なのだろう。伊月は見なかったことにして、「それくらい酷いテンションだったってこと！」と笑い飛ばした。せつかく元気になったのだ。わざわざ掘り返すこともない。ただ、笑ってこうして話していれば、それでいいのだ。

それから、決意表明もした。  
「満尋、私やつぱり諦めないよ。元の世界へ帰る方法、絶対見つけてみせるから」

「……そうか。分かった。そこまで言うなら、やってみる。俺も、もうあんな悲観的なことは言わないさ」

伊月の意志の強さが伝わったのか、満尋は微笑を浮かべていた。満尋の緩く三日月形をつくった口元が、伊月の心を躍らせる。

「だからね。もし、私が帰る方法見つけたら、その時は一緒に帰ろうね」

きつと、自分の顔は嬉しさで笑顔全開だったろう。言葉まで弾んでいたかもしれない。満尋は「まあ、頑張れよ」と言った。もちろん、そのつもりだ。

とはいえ、どこから手を付けたものかさつぱり見当がつかない。何から始めたらいいだろう。

「いーつき。今日は行商行かないだろ？ 一緒に山行こうぜ」

共同の井戸で長屋の人たちと洗濯をしていると、後ろから吾郎太

が声をかけてきた。洗剤代わりに灰を溶かした灰汁を使って洗濯をする。これを使うと汚れが良く落ちるのだ。ごしごしと動かす手は止めずに、「山？」と聞き返す。

「そう、またきのご採りに行こうって、みんなと話してたんだ。今日は彩にい居ないから、伊月が来てくれないと困るんだよ。母ちゃんには言つてあるからさ」

肩口を掴まれ、行こう、行こうとせがまれる。なんだか今日の吾郎太は、いつもよりかなり子どもっぽい。伊月以上にすっかりしているというのに、そんなに茸狩りがしたいのだろうか。しかし、紅葉狩りならまだしも、茸狩りだなんて絶対汚れるじゃないか。お美代さんから貰った、大事な小袖を汚してしまいたくはないと思つていと、新たに洗濯物を抱えた長屋の小母さんが話しに入ってきた。「あらあら、吾郎坊つたら。伊月ちゃん、行つてあげたら？」

「最近行商でお店にいないから、きつと寂しいのね」

一緒に洗濯をしていた小母さんたちが、行つてらっしやいと口を揃える。寂しいなんてことあるだろうか、と吾郎太を見れば、大きな目をきらきらさせてじつとこちらを見つめてくる。手に力を込めて布の水気を絞ると、「しょうがないなあ」と、溜息をついた。滅多に伊月を頼らない吾郎太に、甘えられては断れない。「やったー」と、飛び跳ねる吾郎太に、「これが終わつたらね」と釘を刺す。すると、結婚して何年と夫を転がしてきた小母さんたちが、

「吾郎太が手伝えば、早く山に遊びに行けるわよ」

と微笑んだ。お陰で朝の重労働である洗濯もいつもより早く終わったのだが、ちゃっかり自分たちの分まで、吾郎太にさせる主婦の強かさには恐れ入る。縄に全ての衣を通して木の枝に引っ掛けると、襷掛けを解いて茸狩りの準備に懸かった。

せつかくの小袖を汚したくない、と言つたらお美代は「そんなのいくらでも汚していいわよ」と、笑つて言つた。それでも渋る伊月にお美代は丁子色の袴を貸してくれた。茶色っぽいこの袴なら、あ

まり汚れも気にしなくていいだろう。足を保護するために脚絆きゃはんを脛に着けて、邪魔にならないよう吾郎太と同じように、高い位置で髪をポニーテールに結ぶ。長屋の小母さんに借りた籠を背負って、吾郎太と共に町の北側にある山へ向かった。

町を歩いている途中、ふと空き地の前で立ち止まる。

巴はつい先日嫁いでいった。相手方が迎えに来たので見送りはできなかったが、落ち着いたら山本屋宛に文をくれるのだそう。初めは巴の結婚には反対だった伊月も、巴が納得しているなら、とそれ以上は何も言えなかった。彼女は明るい顔でこの町を離れたのだ。後は巴にとってこれが良い縁談であったことを願うばかりだ。

田んぼが続く町の北側を進むと、小さな北門が見えてくる。そこに子どもが三人集まっていた。一人は伊月も何度か顔を合わせている吾郎太の親友佐助。そして、その弟分の栄吉。もう一人は初めて会う子だ。佐助は吾郎太と同じ年で、栄吉は二人より二つ年下。初めて会う子は、その栄吉よりももっと幼い。

「ごめん、遅くなった。伊月の準備が遅くってさ」

「え？ 私の所為だけじゃないでしょ」

可愛らしく甘えてきた吾郎太はどこへやら。あれは気の無い伊月を誘い出すための演技だったらしい。そして、吾郎太がそんな態度で接するものだから、友達の佐助や、時に栄吉にまで伊月は妹扱いされるのだ。

「え？ 伊月だったのか。男の格好してるから分からなかった」

袴姿で鬘をしているからだろうか。佐助が伊月の姿を見て驚嘆した。流石に格好を変えただけでは男に見えないだろう。「そんな冗談にはのりませんよー」と返したら、目を背けられた。

「そうだ、こいつ。俺ん家の向かいんとこの宗兵衛」

佐助がぼんと宗兵衛の肩を叩いた。前に出された彼は、おどおどしながら栄吉の後ろに隠れてしまった。人見知りが激しいのだろう。伊月とは初対面だし、自分も子どもの頃に年上のお兄さんと会った時は、緊張して母親の側を離れなかったから気にしない。

「伊月です。よろしく」  
と、しゃがんで微笑むと、少しだけ顔を出して「……宗兵衛」と言  
った。可愛いなあ、と和んだところでそろそろ行くようだ。五  
人は北門を出て山へ向かった。

## 十三夜月の宴 2

「どれくらいで着く？」と聞けば、「すぐだよ」と返ってくる。しかし、これは決して「すぐ」ではないと、この世界に来て伊月は学んでいた。

この世界には時計がない。時計がないから、皆それぞれ自分の時間で生きているのだ。約二時間置きに鳴る時鐘は、時間の感覚を合わせる目安の一つではあるが、それでもかなりアバウトなものだ。時間の単位は、次の時鐘が鳴るまでの時間をだいたい一刻と呼び、その半分を半刻、さらに半分の四半刻がある。しかし、ここまでなのだ。30分未満の時間を表す言葉が無いのである。現代のようにあと3分早ければ電車に乗れた、なんてことも無いから実際必要無いのかもしれない。だが、この「すぐ」という言葉に騙されではない。5分でも1時間でも「すぐ」なのだ。

町の北門を出て田んぼが続く中を歩いていく。稲刈りをしている農民を横目に見ながら、20分は歩いただろうか。伊月たちは茸狩りの場、雷土山いかづちに到着した。山道がある程度登っていくと、吾郎太が「この辺で始めるか」と歩みを止めた。

蛇のようにくねくねと生えた木や、反対に真っ直ぐに高く伸びた木など、様々な植物が生えていた。少し道を外れれば、足元は散り始めた枯れ葉でふかふかしており、気を付けねば足を取られてしまう。

「じゃあ、伊月は宗兵衛と一緒にここにいて。俺たちもつと上の方まで行ってみるから」

吾郎太は佐助と栄吉を連れて更に奥へと入っていった。迷子にならないかと心配したが、彼らは何度もここで遊んでいるというから大丈夫だろう。伊月は茸の種類なんて分からないし、きつと宗兵衛の子守のために呼ばれたのだと思う。まだ小さい彼を連れて、道を外れた所へは行けないだろうから。



「宗兵衛くん、皆が戻ってくるまでお姉ちゃんと一緒に遊んでようか」

ふらふらと歩き回る宗兵衛は見ていても危なっかしい。小さな子ども特有の、体に比べて大きい頭は、バランスが取りにくいのか時々がくと傾くことがある。小さい子どもが身近にいなかった伊月にとって、歩くだけでハラハラさせられる宗兵衛は、まったく未知の生き物であった。きよとん、と首を傾げた宗兵衛は「お姉ちゃん？」と口にする、辺りをきよるきよる見渡した。

「お姉ちゃん、いない」

「……伊月お姉ちゃんと遊ぼうね」

引きつる口元をどうにか笑顔の形に持っていつて優しい声を出す。そんなに男に見えるだろうか。髪形と服装以外は何もいじっていないのだが、小さな子どもに言われると素直過ぎて胸にぐさりとくる。「でもはかまは男の人しかはかないよ」

宗兵衛の言葉に、なるほど先入観から男だと思ったのか、と少し安心する。確かに、身近で袴をはく女性はいないだろう。髪も女性には下に垂らすか、布で包んで中に入れてしまうかだから、高い位置で結んでいる伊月は男の髪型をしているのだ。

「そうだね。でも、今日はいっぱい動くから、女の子でも袴をはいてきたんだよ」

そう言うと、「ふーん」と宗兵衛は返事をして落ち葉を拾い始めた。色とりどりの落ち葉は、集めるだけでも楽しいのだろう。伊月も一緒に地面に落ちた中から綺麗な葉を選ぶ。今夜は『影映り』をするから、満尋にもこの紅葉を見せてあげよう。ひと時の間、葉の形や色をあれこれ吟味していると、木々の隙間から賑々しい声が近づいてくる。

「すっげーたくさん採れたぜ、宗兵衛見ろよ」

藪の中から吾郎太たちが現れ、籠いっぱい茸を差し出した。伊月は拾った紅葉を懐に大切にしまうと、籠を受け取った。宗兵衛は集めた葉を放り投げて、三人が採ってきた茸に夢中になる。

「ねえ、あのお姉ちゃん、化け物なのに全然怖くないね」

茸を両手に抱えた宗兵衛が、伊月の方を見て笑いかけた。「そうだろう」と、頭を撫でる佐助を、吾郎太が怒気を孕んだ瞳で見つめる。

「佐助！ なんだよそれ。お前そんなこといつに言ったのか！？」  
隠しもしない苛立ちのまま指を突き立てられ、宗兵衛は佐助の後ろに引つ込んだ。突然怒鳴られて訳が分からないのだろう。泣き出しそうだ。「は？」と怪訝な顔をした佐助に吾郎太が飛び掛る。胸倉を掴むと勢い余って二人とも地面に転がった。半ば呆然としていた伊月も、荒れ始めた空気にはつとして吾郎太を引き離し、栄吉は佐助の身体を支え起こす。

「い、言つてねえよ！ ただ、山本屋に化け物が住み着いてるって噂があんだよ！！」

それは戌親の母親が見たというあの話だろうか。いつの間にか伊月たちの知らないところで広まっていたらしい。戌親が噂を流したとは思えないが、人の口に戸は立てられないということか。どれだけの人が信じているか知らないが、あまりに酷いと山本家の皆に迷惑がかかってしまう。それを聞いて、吾郎太が悲痛な表情を浮かべた。

「俺だつて伊月がそうだとは思つてねえよ。だから、信じてる宗兵衛連れてきて、噂は出鱈目だつて教えてやりたかつたんだ……」

乱れた襟を直しながら佐助が言う。佐助の優しい気遣いに「ありがとう」と呟くと、吾郎太が座り込んだ佐助の手を引いて立ち上がらせる。完全に吾郎太の早とちりであったから、誤解が解ければ笑つて許しあえたようだ。ぐずり始めた宗兵衛と手を繋ぐと、伊月は噂がどれくらい広まっているのかを聞いてみた。

「町の東側が結構広まつてるな。吾郎太が知らないつてことは、山本屋さんの近くはみんな伊月と顔見知りだから、相手にしてないんじゃない？」

「あんまり気にしちゃだめだよ」

栄吉が沈痛な面持ちの伊月を慰める。子どもに励まされる高校生  
って駄目だな、と笑顔を浮かべると、「大丈夫。ありがとうね」と  
栄吉の頭を撫でた。

一段落したところで、吾郎太は伊月の空の籠と自分の籠を交換し  
て、「今度はあっちの方に行ってみるな」と、さつきとは別の方向  
へ駆け出していった。残された伊月と宗兵衛はまた留守番である。  
それにしても、噂のことは早くなんとかしなないといけない。町の人  
たちに村八分にされたりしないだろうか。授業で習った村八分が何  
なのかは忘れてしまったが、確か仲間はずれにされることだった気  
がする。それとも、国の役人がやってきたりするのだろうか。これ  
は、ますます早く山本家を出ないといけないと思案していると、近  
くで遊んでいた宗兵衛の姿が見当たらない。

「え？ ちよつと。宗兵衛くん!？」

さつきまでこの辺りで、苺で遊んでいたはずなのに、一体どこへ  
行ってしまったのか。籠を残して伊月は辺りを探し始めるが、宗兵  
衛はどこにもいない。

「そーうべーいくーん!!」

ひらひらと落ち葉が舞い散る中、大声をあげて呼びかけるが返事  
は無い。辺りを見ることに集中していた所為で、足元が疎かになっ  
た。

「きゃ、わあああああ!!」

伊月は濡れた落ち葉に足を取られてバランスを崩すと、そのまま  
勢い良く山の斜面を滑り落ちていく。

強かに地面に身体を打ちつけると、そのまま意識が遠のいた。

### 十三夜の宴 3

『 Good morning! Wake up!! Wake up!! Good morning 』

探り当てた目覚まし時計に伸ばした手を打ち付けると、喧しい騒音がピタリ止んだ。期末テストも終わったのだから、ゆっくり寝かして欲しいものだ、まだ眠たい目を擦りながら布団を剥ぐ。伊月はぼんやりとした頭のまま、制服のシャツに袖を通しスカートを履くと鞆を持って部屋を出た。ダイニングでは父親が新聞を捲り、母親が朝食の準備をしている。顔を洗ってから「おはよう」と両親に挨拶をして、冷蔵庫から牛乳を取り出しコップに注いで席に着いた。リビングでチカチカと光るテレビを見て、母親が「まあ」と一驚する。

「通学路で通り魔事件ですって。嫌な世の中ね。あなたも気をつけなさいよ」

「大丈夫でしょ。別の県だし。この辺じゃ起きないって」

チン、と音がして食パンがいい色になる。ジャムをたっぷり塗って口に頬張ると、母親が呆れた顔をした。

「子どもが二度と家に帰ってこないなんて、親御さんも可哀想にねえ、お父さん」

父親は経済面から顔を上げないまま、

「人通りの多い道を選んで帰りなさい」

と言った。

「止めてよ、これから学校行くのにそういう話。……あ、もう時間だ」

ニュースの左上に表示された時刻を見て、一気に牛乳をあおる。

口元に白髭が出来ていないこと確認して、玄関へ向かった。

「行ってきまーす」

「はい、行ってらっしゃい」

玄関から一步踏み出すと、白い光の洪水に飲み込まれた。慌てて振り向いても、もうそこには何も無く、虚無の世界が広がっていた。

はっと目が覚めると、伊月は鮮やかな錦の絨毯に体を預けていた。ふかふかに積もった落ち葉を払い、起き上がる。ここは雷土山だ。少し薄暗いのは、木々が邪魔して光が入ってこないせいか。

(え、っと確か、宗兵衛くんが居なくなって……私)

気を失う前の記憶を思い出して、ぱっと崖の方を見た。斜面には伊月の滑り落ちた後が生々しく残っている。結構な高さを滑り落ちたようだ。崖の下半分はゴツゴツとした大きな岩が積まれていて、とても一人では登れそうにない。

「……これ、帰れるのかな」

宗兵衛を戻ってきた吾郎太たちが見つけてくれれば良いが、もし、自分と同じように崖から落ちていたとしたら。一応名目上は子どもたちのお守りで付いてきたというのに、なんとも情けない。遭難したときはどうすれば良いのだったかと、昔キャンプをしたときのことを思い出す。しかし、打ちつけた体の痛みと心細さで何も思い出せなかった。

「ゴーろーたくーん！！ さーすーけーくん！！ だーれーかー！！」

手始めに大声を上げてみたが、返ってくるのは鳥の鳴き声くらいだ。何度か呼びかけては見たが、結局喉を痛めただけで、誰かが助けに来てくれる気配は無かった。

助けを呼ぶのは諦め改めて辺りを見渡してみると、後ろの方で寂々と佇む木造の建物があった。伊月は少し様子を見てみようとして一歩足を踏み出したが、右足首を激しい痛みで襲われ、蹠踵めいた。落ちた時に捻ったようだ。しかし、崖から落ちて片足を捻っただけなのは不幸中の幸いだろう。伊月は手頃な棒を見つけると、それを支えにひよこひよこ足を引きずりながら移動した。

建物の正面に回ると、その建物が寂れた神社であることが分かつ

た。前方にだけ庇が伸びた平入りの本殿は、外陣の扉が朽ちて倒れ、内陣、祭壇まで丸見えになっている。放置されて随分経つのだろう。庇を支えている4本の柱のうち、左側の一本が腐り落ちていた。神社の扉など滅多に開かれることはないから、興味が勝って本殿に近づく。右足を庇いながらぎしぎしと鳴る階を上り、仄暗い社の中に足を踏み入れた。

歩くたびに軋んだ音を立てる板敷きの床は、時々たわんで注意しないと踏み抜きそうになる。二間ほどの距離だというのに、祭壇までは随分と時間がかかったように思えた。

「これ……朴の花？」

祭壇の正面には、瑞香が持っていた太刀と同じ花が彫られていた。八枚の大きな花弁の特徴的な花は間違いなく朴の木の花である。そして、その花の後ろには鳴門なるとのように渦を巻いた稻妻紋が走っていた。これがこの神社の神紋なのだろうか。一体どんな神様を祀っていたのだろうか。神という存在がいるかどうかは分からない。現代では新年の初詣や夏祭りに行くぐらいのものだった。しかし、この世界では本気で神仏の存在を信じている人がたくさん居る。そんな人たちが、どうしてここに祀られている神様を忘れてしまったのだろうか。それが伊月には不思議でならなかった。

いかに神様とて誰も参りに来ないのは寂しいだろう。伊月は懐から拾った紅葉の一枚を取り出すと、壊れた祭壇の前にそっと置いた。そろそろ社から出ようと踵を返すと、爪先に何かが当たり床の上を転がっていった。目で追うと、外から入る光を反射して鈍く光っている。手にとって見ると、それは何かの破片であった。厚さが1センチメートルも無い金属の欠片は、平らな面と、細かな模様がありしらわれた面の二面があり、全体は扇形で縁ふちが弧を描いている。

「……なんだろう？」

他に割れたような破片は見つからないし、本当に欠片はこれだけだろう。祭壇関係の物ではないと勝手に決めて、伊月はそれを懐に仕舞い込んだ。よく分からないが持っていた方がいい気がする。

入ったときと同じように足元に気をつけて社を出ると、とりあえず真っ直ぐ進んでみることにした。すると一陣の風が吹き、地面に散った落ち葉がふわり舞い上がる。

風のために瞑っていた目を開けると、目の前の景色は僅かながらに変化があった。舞い上がった落ち葉の下から石畳が現れたのである。

（神社があるなら、参道もある！）

伊月が棒で落ち葉を避けると、下から石の敷かれた道が顔を出した。これを辿っていけば、どこかの道に繋がるはずである。伊月は嬉々としてその道を歩いていった。これで、帰ることができる。時々棒で突付きながら、自分が参道を通っていることを確認し進んで行く。人が通らなくなつてから長いこと経っている所為で、所々木々が邪魔をしたり、土に埋もれたりしていたが、それでもなんとか見失わずに歩き続けることができた。すると、伊月の目の前に灰色の人工物が現れた。大きな鳥居だ。神社同様朽ち果てているのに、丸い二本の柱は毅然と立ち続けている。まるで、どんなに人々に忘れ去られようとも、ここからはいつ何時も神の領域であるぞ、と言っているようである。見上げると、額束がくづかには『鳴守神社』と書かれているのが辛うじて読めた。

ここで参道は終わりだ。伊月は姿勢を正して神社の方に一礼すると、鳥居を潜つてその向こう側へと出た。

鬱蒼と茂る藪を掻き分けて飛び出した先は、来るときに吾郎太たちと通つた山道だった。見覚えのある場所に出てほつとしてみると、遠くで小さく呼んでいる声が聞こえてくる。

「ここだよー!!!」

こちらも大きな声を出して手を振ると、程なくして小さな影が一つ二つと現れた。どうやら逸れたのは伊月だけのようだ。皆、顔をぐしゃぐしゃにして「心配したぞ」と怒って、泣いている。宗兵衛がわんわんと泣き出すと、伊月も釣られてほろりと涙を零した。足を捻っているので、吾郎太や佐助に支えられながら山を降りる。藪

に隠れてしまったのか、もう一度あの鳥居の姿を見ることは出来な  
かった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9934v/>

---

水面の月

2011年10月26日06時16分発行